
異世界情景

独楽犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界情景

【Nコード】

N1209G

【作者名】

独楽犬

【あらすじ】

もしかしたらありえたかもしれない歴史。どこからか現実とは分岐した世界。我々の知らない日本。そんな異世界の防人の物語。

趣旨説明

深海真「で、これは一体なんなんだ？」

神楽美香「言うなれば作者の息抜きみたいな」

深海「?????」

神楽「んむ。作者は妄想癖があるからな。いろいろな空想の日本を設定を考えて、それをオムニバス形式で紹介するつもりらしい」

深海「なるほど。しかし、3つも連載をしているのに、さらに1つ追加して大丈夫なのかい？」

神楽「大丈夫だよ。長期連載するような性質のものではないし。あくまで息抜きだし。大丈夫、たぶん」

深海「たぶんですか」

神楽「というわけで読者の皆さん。なにかご意見、ご要望、アイデアがございましたら、小説の評価・感想欄にどしどし書き込んでくださいな」

彼方の希望 1

シベリアの夏は暑かった。シベリアと聞くと、どうしても氷に閉ざされた寒い大地と想像されるかもしれない。確かに冬は厳しい。しかし、だからと言って夏はその分涼しいというわけではないのである。8月の終わりには雪が降る地域もある一方、夏には時に30度を越えることもあるのだ。

そのためだろうか。演習を終えた戦車の群れが街の郊外の駐屯地を目指して道を進んでいるが、キューポラから顔を出す乗組員たちはみんな額に汗を浮かべ、だるそうな表情である。

「畜生、シベリアって言うから涼しいのかと思ったたら何て様だ」

とある戦車で砲塔内で装填手がぼやいている。

「黙れ杉下一等兵。それとも歩兵になって、南米のジャングルで麻薬漬けになりながらゲリラと遊ぶほうが好みかな？」

ベテランの曹長である砲手の柊がそれを窘めた。

「かんべんしてくださいよ」

「ここは最前線なんだ。だらける余裕などないぞ」

なるほど。現在、日本はいくつもの“前線”を抱えている。東西に分断されたアメリカ・カナダ、中東に睨みを利かせるインドと対するパキスタン、そして熱線が繰り広げられる南米コロンビア。しかし将来の第三次世界大戦時に主戦場となるのは間違いなくここシベリアである。オビ川を挟んで東に日本・EATO 東亜条約機構 陣営側のシベリア連邦共和国、西にドイツ・WTO ワルシャワ

条約機構 陣営のロシア国家社会主義共和国が対峙して、両陣営200万の軍隊が睨み合いをしている。

「そう睨まないでください。それにこの二五式戦車さえあれば、ナチ公なんてイチコロですよ」

そう言つて杉下は砲塔の壁をパンパンと叩いた。

二五式戦車は日本陸軍の保有する最新の戦車である。主砲の長砲身10糎半戦車砲は優れた命中精度を誇りドイツ戦車の正面装甲を貫く十分な威力があると信じられている。しかしながら、日本軍上層部は杉下ほど楽観的でなかった。

「それくらいにしておけ。この暑さは誰だつて文句を言いたくなるさ」

2人の様を見かねた車長である佐久間中尉が砲塔内に頭を戻して止めに入った。

「ほら街が見えてきたぞ」

杉下が装填用手用キューポラから頭を出すと、確かに丘の下に広がるノヴォシビルスクの街並みを臨み見ることができた。

ノヴォシビルスクはオビ川に沿った国境の街で、人口80万人ほどのシベリア共和国第二の都市である。東西冷戦の最前線ながら活気に溢れ、綿密な都市計画に基き整然と整備された街並みは日本の内地の都市計画にも大きな影響を及ぼしている。この街の防備は佐久間らが所属する帝國陸軍第14師団の管轄である。だが佐久間は知っていた。戦争になれば、この美しい街を見捨てて東に逃れねばならない事を。まことに遺憾な話であるが、着実に軍備計画を進めてきた日本陸軍であつたが現在でもドイツ流電撃戦を正面から受け

止られる自信は無かった。そのため、日本陸軍は冬戦争時のフィンランドに倣って、シベリアの長大な縦深を行かしてモッテイ戦術を敢行するという消極的な防衛計画を練っている。となれば、最前線の街は捨石とするしかない。

「ところで、兵営に戻ったらちゃんとシャワーを浴びて着替えるよ。今日は白善ヨブベク・ソン大將が視察に来るぞ。なんでも重大な発表があるらしいぞ」

「分かってますよ中尉」

キューポラから顔を出したまま杉下が言った。

ペク大將 正確には満州国軍なので上將 は、日本軍第14師団が所属するEATO軍西部方面軍の司令官で、日本軍3個師団、シベリア共和国軍2個師団、満州国軍2個師団、中華民国軍1個師団、蒙古軍1個旅団など合計20万の大兵力を指揮する立場にある。満州国軍人では初の朝鮮系上將で、大戦時には八路軍などの抗日ゲリラ討伐に従事していたという。

「しっかし、綺麗な夕日だなあ。あの空のどこかに“かぐや11号”が飛んでいるのか」
「どいつもこいつもそればかりだな」

柊が苦笑しながら言った。日独が宇宙開発競争をしている中、日本がそれまでの劣勢を覆すべく始まったのが日本史上最大の科学計画とも称される月面有人探査プロジェクト、“かぐや計画”である。そしていよいよ月着陸船を載せた月ロケット“かぐや11号”が4日前に打ち上げられたのである。テレビでは延々と特集番組が流れ、世界中の人々がその動向に注目していたのだ。無論、シベリアの日本軍も例外ではない。

「確か今夜だったよな。月面着陸は」

「そうですね、中尉。まさか我らが司令官はこんな日に夜間訓練を実施するとか、無粋なことを言うんじゃないでしょうね？」

時に皇紀2629年7月20日、日没前のことであった。

彼方の希望 1 (後書き)

“彼方の希望”は、かつて2ちゃんねる軍事板に2003年1月から2006年5月まで3年以上も続いた“もし日本が勝っていたなら”スレから多大な影響を受けています

彼方の希望 2

佐久間は身嗜みを整えると部下を引き連れて駐屯地の広間に出てきた。そこには第14師団の各部隊の兵員が集まっている。佐久間らがその中に入って整列して暫くした後、白將軍が現われた。

白善ヨブ満州軍上将、48歳にして大將にまで登りつめたのだから優秀な指揮官に違いない。彼は同じ世代の朝鮮人の中で社会的に高い地位に登りつめた人物と同じように師範学校で中等教育を受けた。そして彼は満州軍官学校に進み満州軍の対ゲリラ特殊部隊の将校として大東亜戦争を戦ったのである。現在では対ゲリラ戦法の先駆者として知られている。そんな彼が整列する兵士らの前に置かれた演台の上に立った。

「諸君、今夜はいよいよ日本が世界で初めて月面着陸を成し遂げる。宇宙開発においても黄色人種が決して白人に劣らないことを示す時がやってきたのだ。そして東亜陣営の最前線で戦う諸君らもその栄誉の瞬間の目撃者となる権利を当然に持っている筈である」

整列する兵士たちの顔色が次第に明るくなっていく。

「よってEATOシベリア総軍司令部は各方面軍司令官に対して、今夜午前零時より当直兵以外の全員に24時間の自由時間を与えることを通達してきたのである。」

月着陸は午前3時頃を予定している。諸君らも歴史の目撃者となり、己の任務に対する責任への理解を今まで以上に深めてほしい。では、解散」

白將軍が演台を下りると兵士たちが一斉に歓声をあげた。

兵舎に戻った兵士たちの顔は笑顔一色であった。みんながテレビが置かれている食堂に集まった。

「しかし、テレビを見るのも久しぶりだな。最近、暗いニュースばかりだから禄に見てもいなかったよ」

佐久間が覚えているのは、本土での反戦運動とか南米戦線の芳しくない戦況だとかそのような話題ばかりである。聞いた話によれば長期休暇を利用して本国に帰郷したある兵士は、制服を着て電車に乗っていると学生が集まってきて目の前で国軍や政治への批判を始め、さらにその矛先を兵士自身にまで向けてきたという。そういう話を思い出すと、先ほどの白將軍の“己の任務に対する責任”という言葉が空しく感じるように思う。いったい我々はなにを守っているのだろうか、と。

「ところでコロロフ博士ってなんだ？」

柘曹長がテレビを指差していった。

テレビ画面の中では“かぐや計画”責任者の糸川博士が明らかに白人らしい人物の写真を手に持って、賛辞と追悼の言葉を述べていた。

「コロリョフ博士だよ。セルゲイ・コロリョフ博士。元はロシアでロケット研究をしていたんだが、スターリンの粛正でシベリア送りになってね。それで関東軍に救出されたんだ。日本の宇宙開発の父さ。過労が祟って早死にしちゃったけど」

佐久間が説明した。日独宇宙開発競争はフォン・ブラウンをはじめめとする多くの研究者を抱えるドイツが常に先を進んでいたが、コ

ロリヨフ博士の登場により日本はドイツに追いつき、そして月面着陸により追い越すことができるようになったのである。しかし日本ではほとんど唯一の専門家であったこともあり多忙な日常が彼の身体を蝕んだ。結局、コロリヨフは月着陸を見ることなく2626年西暦では1966年に逝去した。しかし“かぐや計画”は彼の後継者によつて推進され、今まさに成功しようとしているのだ。

「さすが、大学出の士官だけありますね！」
「ありがとう」

佐久間は帝大出の幹部候補生出身の士官である。しかし柊の言葉に他意は無かつただろうがその言葉は佐久間の心に複雑な感情を残した。彼が学んだ大学は今や反軍運動の急先鋒になっているのだ。

彼方の希望 2 (後書き)

ちなみに史実の白善ヨプ將軍は

28歳で師団長を勤め

29歳で准将、つまり将官に昇進して(ここで朝鮮戦争勃発)

30歳で軍団長になり

31歳で韓国陸軍参謀総長

32歳で韓国陸軍初の大将に昇進

とうとう素晴らしい経歴の持ち主です。

建国・健軍直後で人材が限られ、しかも朝鮮戦争という国家存亡の危機の出来事であったとは言え、これほど早い昇進は白將軍の有能さを物語っているように思えます。

ちなみに戦前・戦中の経歴については大体史実通りです。

彼方の希望 3

第二次世界大戦、大東亜戦争が枢軸国軍の圧倒的な勝利で幕を閉じてから早20年以上が経ったが、もはや大日本帝国の全盛期は終わってしまったようである。南米戦線の長期化は確実に帝国を蝕みつつある。戦費が財政を圧迫し、人々の心は荒みつつあった。そんな中で“かぐや11号”の月面着陸は人々の希望になりつつある。暗い世の中を照らす希望の光に。それはシベリアの兵士たちにとっても同じである。

「しかし、成功したらさ、その後はどうなるんだろう？ やっぱ月に宇宙基地を造るのかな？」

佐久間の目の前で、杉下が無邪気な笑顔で夢の未来世界を思い描いている。

「どうだろうな。成功したら、みんな冷めちまってもう終わりかもよ？」

柀の言葉に杉下はあからさまに顔を歪めた。だが柀の言葉が真実かもしれないと佐久間は考えている。“かぐや”計画には巨額な予算が注ぎ込まれていて、南米戦線と戦費とともに国家財政の重荷になっている。それに“科学の振興”というより“国家の威信”のために始まったような計画である。月着陸という結果だけ得られれば多くの人間が満足してしまうだろう。月探査計画は“かぐや”をもって終了になるかもしれないし、それどころか“かぐや”計画そのものも規模縮小になる可能性が十分にある。そんなことを考えていると佐久間自身の気持ちもだんだん冷めてくる。

みんなの希望“かぐや”、だがそれは一瞬だけの儚い夢なのかも

しない。

「あっ！着陸船が離れていきますよ」

杉下の叫び声に佐久間の意識が現実に戻された。

テレビの画面は“かぐや1号”の母船に搭載されたカメラに切り替わっていて、母船から離れていく着陸船の姿を映している。そして映像は今度は月着陸船の外部に搭載されたカメラに切り替わった。

「月だ！」

誰かが叫んだ。いくつものクレーターが並ぶ荒涼とした黄色い大地、それはみんなが思い浮かべる月そのものであった。着陸船はものすごいスピードで飛行しているようで、クレーターは画面の上から下へと次々と流れてゆく。だが大地がだんだんと着陸船に近づいているのは感じられた。

「いいぞ！もうすぐだ！」

「がんばれ！がんばれ！」

「もう少し！もう少し！」

食堂にいる将兵たちが次々に立ち上がってそれぞれ届くわけのない応援の言葉を口にする。夜になってだいぶ気温が下がったが、この部屋の中の温度はじよじよに上がっているように感じられた。

テレビ画面の向こうの月着陸船はじよじよに速力を落とし、大地まで“手が届きそう”な距離まで近づいている。さきほどまで応援合戦をしていた将兵も黙り込んで、テレビを凝視している。

やがて着陸船の脚が月の大地に触れた。わずかな衝撃で映像が少し乱れた後、着陸船は停止した。

<筑波、こちら“翁”^{オキナ}>

テレビから聞こえてくる何者かの声。月着陸船の乗組員だ。

<姫は月に帰った>

着陸成功の合図である。

佐久間は先ほどまで冷めていた心がどんどん高揚していくのが感じられた。成功を祝う拍手の音が鳴り止まず、隣は杉下が「万歳！万歳！」と叫んでいる。

その時、食堂に居た人々の心は間違いなく1つになっていた。それは他の日本人たち、いや着陸の瞬間のテレビ中継を見ていた者すべてとも同じであろう。人類を未来の希望を小さな宇宙船と2人の宇宙飛行士に託して。たとえそれが一瞬だけの儚い夢だとしても、また明日になればつらい現実が待っていたとしても。この瞬間だけは彼方の希望に明日を託していたのである。

皇紀2669年7月20日午後8時17分40秒（世界標準時）、人類は史上初めての月面着陸に達成した。それは人がはじめて地球以外の星に降り立った瞬間であり、世界が1つになった瞬間であった。

彼方の希望 終

彼方の希望 3（後書き）

というわけで、“彼方の希望”はいかがでしたでしょうか？“小説家になるう”にはいくつかの作品を掲載しておりますが、これはじめて完結させた小説になります。いやあ、1つの物語を終わるまで書くというのはうれしいものですね。

しかし、異世界情景はあくまでもオムニバス、短編集ですからね。また新しい物語をそのうちに掲載することになると思いますが。

話は変わりますが、前話の後書きでも紹介しました白善ヨブ大将（ヨブは火偏に華と書く）が韓国軍の元帥に昇進することになりました。元帥は戦時の階級なのであくまでも“名誉元帥”であります。が、これは韓国軍史上初の栄誉だそうです。

白將軍は戦前に満州軍官学校を卒業し満州軍特務部隊に勤務したという経歴のために韓国前大統領ノ・ムヒョン政権下では冷遇されました。親日派リストに載せられて事実上の売国奴扱いでしたが、この度に李明博大統領政権によって名誉回復がなされたわけです。大変すばらしいニュースです。

戦い未だ終わらず 1 (前書き)

今回の舞台は“世紀末の帝國”と同じ世界。休戦協定の締結を翌日に控えた欧州戦線。連合軍の一員として派遣されている帝國陸軍の守る街です。

戦い未だ終わらず 1

1946年8月14日 ドイツ マルクトレドヴィッツ

第二次世界大戦欧州戦線は膠着状態に陥っていた。ジユネーブで休戦交渉が行なわれている中で連合、枢軸両軍はエルベ川や山地といった自然の要害を間に挟んで睨み合いを続けていたのである。マルクトレドヴィッツはそんな最前線の一部になった街なのである。

マルクトレドヴィッツはフィヒテル山地の一角を成していて、かつてのドイツとチェコスロヴァキアの国境から15キロの位置にありチェコ側の街へプに続く4つの街道が合流する交通の要所である。今はかつての国境線がそのまま両軍を分ける戦線になっているので、その重要性は増している。その街の防御を任されたのは日本陸軍第1軍（軍団扱い）であった。

第1軍は4個師団をもってフィヒテル山地一帯を担当していて、大規模な会戦は起きていないものの山地を構成する800メートル級から1000メートル級の山々に築かれた陣地を巡って一進一退の攻防をドイツ軍相手に繰り広げていたのである。そして第1軍はマルクトレドヴィッツに第三師団を派遣してその防備を任せていた。マルクトレドヴィッツ郊外に置かれた師団司令部では作戦会議が行なわれていた。

「山地での戦いは我々が有利に進めています。問題は街道です。現在、我が師団に配属されている戦車連隊を中心に防御線を敷いておりますが、シャーマン戦車ではドイツ軍の新型戦車相手に分が悪い。待ち伏せならばともかく、遭遇戦になると危険です」

作戦参謀が前線の状況を師団長に報告した。無論、強力なドイツ戦車に対抗する術は存在しないわけではない。バズーカなどの歩兵用対戦車兵器も豊富であり近接戦闘を挑む手もあるだろう。だが危

険も伴う。戦車に対抗するならば、より強力な戦車で挑むのが一番なのである。無論、彼らも軍人なのだから兵の命を惜しむようなこととはしない。しかし戦況に決定的な影響を与える激戦の最中ならともかくとして、休戦を目前にした小競り合いで無為に兵を失いたくないと考えているのである。

「斥候隊の報告ではドイツ軍部隊の中には新型の虎戦車の存在が確認されました」

情報参謀が作戦参謀に続いて指摘した。ティーゲル2戦車。70t近い重量に強力な88ミリ砲を搭載する。連合国軍からはキングタイガーと呼ばれるその戦車は間違いなく今大戦における最強戦車の1つに数えられるであろう。

だが師団長である辰巳栄一中将はいかにも余裕といった表情をしている。

「その点は心配ない。連合軍司令部もこの防備に関して関心を抱いているようですね。新型戦車を装備した部隊がこちらに派遣されることになっているんだ。明日、到着するらしい」

マルクトレドヴィッツ市街

鷲峰わしみね一郎いちろうは新任の少尉である。彼は士官学校本科を卒業すると早速、欧州に派遣された。そしてアメリカ兵の運転するジープに乗って彼は配属された第三師団を目指してマルクトレドヴィッツまでやって来たのである。

ジープが止まると鷲峰が荷台から飛び降りた。振り向いて、運転手に別れの挨拶をすると司令部を目指して歩き出した。しかし鷲峰はその途中で大変なことに気づいた。

「司令部、どこだ？」

彼は司令部の場所を知らなかった。すると彼は兵士の一団を見つけた。彼らが敬礼をしたので、鷲峰は答礼をして訪ねた。

「1つ聞きたいことがあるんだが」

「お尋ねしたいことがあるのですが」

兵士たちの代表らしい1人の二等兵が鷲峰とほぼ同時に言った。

「少尉殿から」

「師団司令部への行き方を知らないか？着任したばかりで」

「すみません。実は私もそれをお尋ねしようと思っていたんですよ」

「そうか。じゃあ一緒に探そう」

鷲峰は兵士たちを率いてまた歩き出した。改めて街の様子を眺めると、砲撃を受けたのか損傷した建物が目立つ。それを見るとここは戦場なのだと思いき知らされる。

すると前からまた兵士の集団が現われた。彼らは2人1組で担架を持って運んでいる。そして担架は5つ。担架の上には人が乗っているようで、その上に布が被せられている。しかしどれもぴくりとも動かない。そしてその集団を1人の軍曹が率いてる。鷲峰が下士官を引きとめた。

「君、訪ねたいことがあるんだ。師団司令部はどこにあるのかね？」

「新任ですか？これを引き渡してから案内します」

軍曹は担架を指した。

「ここで待っていてください」

「ところで戦死者かね？戦闘があつたのか？“今は全戦線で膠着状態で、どこも大きな動きはなく安定している”と聞いたのだが？」
「はい。戦死者です。そして大規模な戦闘もありません。毎日、何人が死ぬ。これが日常ですよ。お偉さま方には“大きなこと”ではないでしょう」

それだけ言うと集団を率いて軍曹は去っていった。

戦い未だ終わらず 2

鷲峰は兵士たちとともに市の郊外にある師団司令部に案内された。そこで兵士たちと別れると師団司令部の管理部に出頭し、師団の人事全般を扱っている部長の中佐に向き合った。

「陸軍少尉、鷲峰一郎であります。本日付で第三師団、歩兵第六連隊に配属されました」

「うむ。ではただちに前線に向かってくれ」

中佐はなんの感情も見せずに素っ気無く言うと、事務室に戻っていった。あまりに早々に終わった対面に鷲峰はいくらかの不満を憶えた。これから前線で戦う新任少尉に対してもう少し思いやりを見せてもよいのではないだろうか？

司令部を出ると先ほどの兵士たちと案内してくれた軍曹が待っていた。

「あなたも六連隊でしたね？案内しますよ」

そう言って進行方向を手で示した軍曹であったが、先ほどの中佐と同様に妙に素っ気無い。将校に対する最低限の礼儀は守っているが、その目からは何の感情も窺えなかった。ここで戦っていると皆そうなるのであろうか？

鷲峰を含む兵士の一団は砂利道を行進していた。荷物を満載したアメリカ製の6輪トラックがその横を通り過ぎていく。

「あれに乗れないのかな？」

それは鷺峰がふと呟いた独り言であったが、軍曹の耳に届いていた。

「あれは輜重連隊の車ですよ。将兵の輸送にまわす余裕はありません」

日露戦争直後から既に自動車に注目し大正時代には軍用自動車補助法を成立させて自動車産業を援助してきた日本陸軍ではあるが、日本の根本的な工業力不足はどうしようもなく、結局は陸軍の需要を充たすには至っていない。第二次大戦勃発後にはアメリカからレンドリースにより多くの車輛が貸与されたが、それでも輜重部隊分を充たすのが精一杯で歩兵の自動車化はまだまだ進んでいなかった。だからこそ鷺峰たちは徒步行進をする羽目になったのである。

鷺峰はこれを契機に軍曹と世間話でもはじめて場を和ませようとも考えたが、相変わらず無感情な表情を見て諦めた。代りに兵士たちに目を向け、その中に代表として鷺峰に司令部の所在を尋ねてきた二等兵の姿を見つけた。

「君たちは新兵かね？」

「はい。陸軍二等兵、神崎次郎かんみき じろうであります。1週間前に欧州に着いたばかりで。ところで少尉殿、戦争はもうする終わるとい話を聞いたのですが、本当なのでありますか？」

鷺峰はなんと答えるべきか一瞬迷った。ジュネーブで休戦交渉が始まっているのであるから、近いうちに終結を迎える公算が高いが、それが当然の事実だと広まれば兵士たちの士気を削ぐ結果になりかねない。何事にしても終わりが見えた瞬間が一番気が抜けてしまう

ものなのだから。

「そういう話もある。だが今は戦争中だ。気を抜くなよ」

なんとか無難な答えを返せたように思えた。結局、会話はそこで途切れてしまい、無音の行進に戻った。

2時間ほど経って歩兵第六連隊の連隊本部に到着した。そこで確実に前線に近づいていることも感じられた。本部は森の中の半地下式の壕に設けられているが、周りにはドイツの砲撃が着弾したのか、なぎ倒されていたり裂けていたりする木が目立つ。本部周辺の兵士たちも厳戒態勢で、警衛たちが周りに目を配らしている横で対空高射架に載せられて銃口を上に向けている九二式重機関銃や“連隊砲”としてお馴染みの四一式山砲がいつでも射撃できる状態となっている。

近頃では欧州派遣の帝国陸軍部隊は輸送や補給の都合上から兵員だけを送り装備品はアメリカからのレンドリース品を欧州で受け取り戦場に向かう場合がほとんどであるが、大戦の比較的初期に欧州戦線に送り込まれた第三師団は日本製の兵器をまだ多く使用していた。

鷲峰は連隊本部に着任を報告すると配属先を告げられた。第1大隊第3中隊。

報告を終えて本部を出た鷲峰は彼と同じく第1大隊に配属された兵士たちとともに再び行進をはじめた。そして大隊本部に一度出頭してから今度は第3中隊本部を目指した。ともに行動する兵士の数は各本部を経るごとにそれぞれの配属先に分かれて数を減らしているが、なぜか神崎とは最後まで一緒であった。そして太陽が西に沈

もうとする頃になってようやく中隊本部に辿り着いた。山道を何時間も歩いたのでクタクタになっていた。

中隊本部は山の中腹にある小さな村落の中にあつた。周りの家々はほとんどが被害を受けているようで、屋根や壁に穴が開き、ガラスはだいたい割れていた。そんな中でも住民達は生活をしていたが、その目からは軍曹や中佐のそののように何も感じられない。破片や残骸を片付けている者の姿も何人か見えたが、大多数の住民は無気力で荒れるに任せているようだ。鷲峰が戦線に来る途中で立ち寄ったパリの人々からのような歓迎は期待できそうにない。

中隊本部はこれまでの各司令部と違い、木と木の間天幕を張っただけの簡便なもので、その下に机や椅子、無線機などが並んでいた。

「本日付で第3中隊配属を命じられました陸軍少尉、鷲峰一郎であります」

本部には中隊長らしき大尉と副官らしき中尉、それに案内してくれた軍曹が詰めていた。

「中隊長の陸軍大尉、ながの たつのすけ長野辰之助だ。君の配属だがなあ、みなと湊軍曹、第2小隊は小隊長を欠いていたな？」

「はい。前任者が2週間前に重傷を負って、戦線離脱しましたから」「そうか。では鷲峰君、早速だが赴いてもらおうか」

鷲峰が中隊本部を出ると、入れ替わりに兵士たちが本部の中に入っていた。しばらくすると神崎二等兵が鷲峰の前にやって来た。

「少尉殿、私も第2小隊に配属されました」

「そうかあ。これも何かの縁か……」

鷲峰は最後まで言う前に口を閉ざしてしまった。突如、砲声が轟いたからだ。続いて爆発音。着弾点はその場から確認できないが、安心できるほど遠くではない。

鷲峰と新兵たちは咄嗟にその場に伏せた。耳を手で塞いで砲撃の衝撃に耐えようと心を集中させている中、目線の先に誰かの足が見えた。視線を上上げて何者確かめてみると、あの軍曹であった。しかも、まるで何事もないかのように淡々と煙草を吸っているではないか。彼だけではない。周りに居る古参の将兵たちは突然の砲撃に動じる様子もなく立ったまま時が流れるままにしていた。まるで砲撃など存在しないかのように。

「ドイツ軍の15センチ榴弾砲ですよ。照準せずに当てずっぽうに撃ってくるんだ。嫌がらせみたいなものですな」

軍曹が口から煙草の煙を吐きながら説明をする。まるで他人事のように。

「危険ではないのかね？」

「それほどでも。運に見放されてなければね」

軍曹が言い終わると同時に村の外れの家屋に敵の榴弾が命中した。壁が吹き飛ばされ煉瓦が宙を舞った。それでドイツ軍の砲撃は終わった。

すると中隊本部の天幕から長野大尉が姿を現した。彼もまた何事も無かったかのような顔をしていた。

「鷲峰少尉と新兵の諸君。もう日が沈む。慣れない者が夜の山道を進むのは危険だ。空家を1つ確保しているから今日はそこで休みたまえ」

そう言って長野大尉はボロボロの木造の小屋を指差した。

鷲峰はすっかり疲れていた。しかし眠れなかった。ドイツ軍が30分ごとに睡眠妨害のための砲撃をしてくるからだ。これからはじめの frontline ということで緊張していることもあり、結局、彼は眠れなかったのである。

そして鷲峰は戦場での2日目の朝を迎えた。

戦い未だ終わらず 3

1946年8月15日 山中

ドイツの大地に朝が訪れた。

「眠れましたか？」

鷲峰は神崎の問いに欠伸で返した。

「そうですね。私も全然眠れませんでしたよ」

時間は午前の7時。鷲峰は神崎と他一名の兵士を率いて再び山に登った。そして15分後、ようやく小隊の配置されている地点まで到達した。

第3中隊はある峠を守るべく配置されていて、2つの峰に挟まれた峠の道を挟んで北側を第1小隊、南側を第2小隊が守っている。第3小隊は予備として中隊本部とともに待機中だ。

鷲峰らは第2小隊を守る陣地へと進んでいった。木々が生える斜面に塹壕が掘られ、峠道に向けて機関銃や各種火器が向けられている。陣地へとやって来る鷲峰たちを見つけて第2小隊の兵士たちが次々と集まってきた。

「お前ら、新兵か？」

兵士の1人が鷲峰に続いている神崎ともう1人の兵に尋ねた。

「そうですねありますが？」

神崎の返事を聞いて、兵士たちが一斉に騒ぎ始めた。

「俺は勝川の出身だ！今はどんな様子か知っているか？」

「一宮の駅前の本屋の娘が嫁いだって聞いたんだが、本当か？」

「俺は安城の出でな…」

「上津具のことをなにか知っているか？」

次々と詰め寄ってくる兵士たちに神崎は圧倒されていた。

「いや、その…すみません。私は横浜出身なんですよ」

それを聞くと神崎らを取り囲んでいた兵士たちが肩を落として離れていった。

「そうだな。今日び、こんな有様じゃ同郷同士ってわけにやいかんよ」

日本陸軍は連隊ごとに同じ地方から兵士を徴収するのが普通であるが、大戦が長引き戦線が欧州奥地まで進んだために徴兵区と配属部隊を一致させることが難しくなったのである。

その様子を見て軍曹の階級章をつけた兵士が神崎に声をかけた。

「すまないな。古参兵のなかには日本を離れて5年以上になる者も居る。私も4年目だ」

軍曹は諦観ともとれる不思議な笑顔を見せた。

「軍曹。君がこの小隊の指揮官かね」

鷲峰が下の山道を眺めながら言った。

「はい。藤堂軍曹ふじたかであります。前任の小隊長が重傷を負い後送されたため、臨時に指揮を執っております」

「なるほど。本日より私が指揮を引き継ぐ。戦況の方は？」

「時折、ドイツ軍の小規模な斥候隊が現われるだけです。大抵の場合は我々の手持ちの火器で事足りております」

2人は敵の潜んでいるであろう森を睨みつけた。

マルクトレドヴィッツ 師団司令部

正午を迎えた司令部の前に師団の高級将校が並んでいた。目的は増援部隊の出迎えである。

やがて地面が揺れて増援部隊が現われた。

「デカイな。あれが」

「ああ。M29サムナー重戦車だ」

それこそアメリカ陸軍がドイツ軍のティーゲル2やソ連軍のJSシリーズに対抗するべく開発された切り札である重戦車だ。1944年9月からT29の名で開発が始まり、最近になって南北戦争最年長の野戦軍団指揮官に由来する“サムナー”の名を与えられて実戦配備されたのである。その重量は63tに達し、枢軸国のあらゆる戦車を破壊できる65口径105ミリ戦車砲を搭載するこの戦車はまさに連合国軍最強の戦車であった。それが1個中隊20輜も増援として派遣されたのだ。

「中隊長のフォード大尉であります」

先頭の戦車から指揮官が現われて、見事な敬礼を見せた。

「師団長の辰巳中将だ。よく来てくれた」

辰巳栄一は見事な英語で返した。かつては駐在武官として当時の駐英大使の吉田茂の下でイギリス大使館に勤務していた辰巳は英語が堪能であった。

「噂には聞いていたが、実物を見ると圧倒される。素晴らしい戦車だ」

「ありがとうございます。タツミ將軍。このM29ならジェリーどの戦車なんて一撃ですよ」

そう言ってフォード大尉は愛車の砲塔を手でパンパンと叩いて自信を示した。

そこへ伝令兵がやって来た。

「師団長。軍司令部からです」

その場に居た全員が伝令に注目した。

「ジュネーブの代表団が休戦協定に調印しました！」

高級将校たちは言葉の意味を理解するのにはしばらく時間を要した。

「戦争が終わる、ということか？」

参謀の1人が呟いた。その言葉が決定的なものとなった。

「そうか。終戦か」

「長かったなあ」

「万歳！万歳！」

顔を緩め戦争終結を喜ぶ高級将校たち。日本語が解らず状況を理解できないフォード大尉は怪訝な表情をした。

「なにがあつたのですか？」

訪ねられた辰巳將軍は満面の笑みで答えた。

「戦争が終わるのですよ。休戦協定が調印された」

「それは本当ですか！良かった！これで国に帰れる」

するとフォードは戦車の中に戻り、乗員にその素晴らしい事実を知らせ、さらに戦車を降りて部下の戦車長に教えてまわった。

辰巳は再び伝令兵のほうに目を向けた。

「発効は？」

「はい。明日の午後0時であります」

「まるまる1日か」

そこへ部下への報告を終えたフォード大尉が戻ってきた。

「いやあ、実は先週、この戦車と一緒に欧州に到着したばかりなんですよ。折角ここまでやって来たのに無駄になってしまいましたね」

だが辰巳の表情は険しくなっていた。

「いや。まだ分からんよ。協定が発効するまでの1日の間は戦争中なんだからな」

戦い未だ終わらず 3 (後書き)

ちなみに劇中に登場するM29戦車は実在するものです。正確にはT29試作戦車のまま正式化されず愛称も付けられていませんが。

戦い未だ終わらず 4

1946年8月15日 山中の陣地

鷲峰は陣地から僅かに下がったところに設けられた調理場で昼食を終えてから自分の陣地に戻った。兵士たちは交代で食事を摂りつつ、警戒を続けている。相変わらずドイツ側陣地に特異な動きは見られない。

山中の陣地は景色が素晴らしい。真夏の真つ盛りだが、日本に比べるとずっと湿度が低くて、しかも山中なので気温はそれほど高くない。とても過ごし易い場所であった。だからつい戦場であることを忘れてしまう。

「おかしいですね」

何時の間にか後ろに立っていた藤堂軍曹の声を聞いて、鷲峰は慌てて振り返った。そして自分の無防備さ加減に驚いた。

「おかしいとは？」

「何時もなら嫌がらせの砲撃がくる頃合なんです…」

そこへ見慣れる兵士 といっても鷲峰は着任したばかりで小隊のメンバーを完全に把握しているわけではないが がやって来た。

「伝令！中隊長より各小隊長に出頭命令が出ております」

30分後 中隊本部

鷲峰が朝に登ってきた道を降りて中隊本部にやって来る頃には他

の小隊の指揮官はみんな揃っていた。鷲峰は中隊本部の面々の顔が心なしか緩んでいるように感じた。

呼び出した全員が揃ったことを確認すると長野中隊長はさっそく訓令を始めた。

「たった今、大隊本部から命令が届いた。大隊隷下の全部隊はただちに現状で待機せよ」

それから長野はジュネーブでの停戦協定について伝えた。集まった指揮官たちは信じられないという面持ちである。

「発効は明日正午である。明日の正午以降は絶対にこちら側から発砲してはならない。その点を部下に徹底させてほしい」

長野隊長も笑顔になっていた。

さらに30分後 陣地

一時間ぶりに戻って来た指揮官の妙に晴れ晴れとした顔を見て、兵士たちは眉を顰めた。

「どうしたんだ？あれは」

「さあな。着任そうそう神経が参ったか？」

そんな陰口を言う兵士を横目に藤堂軍曹は昼から続く不思議な状況を自分なりに分析した。そして一つの結論に達した。藤堂は戻って来た鷲峰に駆け寄った。

「少尉。終わっただんですね」

「ああ。終わるよ」

鷲峰は分隊長を集めるように命じた。

10分後、分隊長たちが鷲峰のもとへ集まった。

「諸君、長い戦争であったが、ついに終わるぞ。ジュネーブで連合国軍と枢軸国軍との間で停戦協定が結ばれた。発効は明日の正午だ」

それを聞いた分隊長たちは目を丸くした。少尉の言葉が信じられない様子である。しかし、数秒後には現実を呑み込み、顔を緩めた。

「我が部隊は現状を維持して待機し、停戦発効とともに占領任務へと移行する。武器の使用は自衛のためだけに限定される。その点を兵に徹底するように」

それから幾らか質疑応答が行われた後、解散となった。

停戦発効のニュースはすぐに兵士たちに伝わったようで、みんな笑顔になっている。さっきまでの無表情がまるで嘘のようだ。

「本当に戦争終わるのか！」

「これで家に帰るぞ！」

「日本か。3年ぶりだな」

兵士たちはもう帰る気にいるようだ。まだ占領任務が待っていると訓辞した筈であるが、そちらの方は兵たちにつまく伝わっていないらしい。

鷲峰がそんな兵士たちの姿を眺めていると、藤堂がやって来た。

「本当に終わったんですよね？」

「明日の正午に終わるんだ」

「そうでしたね。これで帰れます。4年ぶりですからね。日本はどうなっているんでしょう？」

すると藤堂は黙り込んでしまった。

「どうした？」

「いやあ、どうも嫌な予感がしまして」

「嫌な予感ね」

その予感は見事的中することになる。

戦い未だ終わらず 5

8月15日 午後10時過ぎ

休戦協定発効まで14時間を切っていた。日本兵たちは一応はいつもどおりに警戒警備を続けていたが、その一方で休戦協定のために気が緩んでいた。居眠りをする者も居れば、呑気に空を眺めている者、どこからか酒を調達して一杯やっている者もいる。それを注意すべき下士官や将校たちも休戦目前ということで、いつものような睡眠妨害の砲撃さえ無いのであるからどこか気が抜けていて見逃している場合がほとんどであった。無論、例外もあったが。

神埼と同じタコツボの古参兵もその1人であった。古参兵は谷の向こうの斜面に目を凝らしていた。

「何か見えるんですか？」

神埼は冗談交じりに尋ねた。

「見えるぞ。なにかが動いている」

返答はえらく真剣であった。

「至急、指揮官に報告」

神埼は伝令役を引き受け、鷲峰らの居る小隊本部に駆け込んだ。

「中村上等兵がそのように言ったのか？」

藤堂が神埼に尋ねた。

「そうであります。それで小隊長殿に報告するようにと……」

それを聞いた藤堂は後ろで横になった空を眺めている小隊長を見つめた。

「その中村上等兵の目は信頼できるのか？」

「はい。獵師の家の生まれで、その手の能力は抜群です。彼の言葉は信じるべきです」

藤堂の言葉を聞いた鷲峰は少しの間黙り込んだ。しかしすぐに結論を出した。鷲峰は新任少尉がもっとも守るべき教訓を遵守することにした。つまり“下士官の言葉には耳を傾ける”である。

「どうすればいい」

「寝ている奴も全員叩き起こしてタコツボに配置しましょう。警戒を高めるのです」

「そんなことやってみんな怒らないかな？」

鷲峰の心配事に藤堂は首を横に振って。

「どうせあと12時間ちよつとです。最後にそれくらい働かせても罰はあたりませんよ。それから中隊本部に報告を」
「そうだな」

鷲峰は立ち上がって、自分用のM1カービン銃を手にとった。

マルクトレドヴィッツ 師団司令部

有線電話を通じて中村上等兵の報告は20分以内に司令部へ伝わった。

「どう思いますか？」

師団長直属の参謀の1人が辰巳栄一師団長に尋ねた。

「確かに気になるな。念のために斥候隊を派遣しよう。ただちに編制をしてくれ」

山中

中隊長は隷下の全小隊に臨戦態勢を命じた。鷲峰の第2小隊はまっさきに態勢を整えていた。兵士達は武器を持ってタコツボに籠もり、何時でも撃てるように弾を込めた。

神埼は相変わらず中村と同じタコツボの中に居た。

「奴らが来ている」

中村が言った。

「見えるんですか？」

「分かるんだ」

神埼はすぐに分隊長に報告した。それはすぐに小隊本部に伝えられた。

報告を受けた鷲峰少尉は連隊本部を通じて連隊砲部隊に照明弾を撃つように要請した。一分後に四一式山砲の1門から照明弾が放たれ、鷲峰の小隊の陣地の上空で光を放ち地面を照らした。タコツボから頭を出して斜面の下を眺めていた鷲峰はフリッツヘルメットの被った男たちの姿を認めた。実物を見るのは初めてだったが迷う必要はなかった。敵である。

「撃て！」

一斉にあらゆる火器が放たれた。各分隊に1丁ずつ配備されている九九式軽機関銃が、上級部隊から配属された九二式重機関銃が、そして九九式小銃が無数の弾丸を放つ。何人かのドイツ兵が倒れるのを確認すると鷲峰は後ろの通信兵の手を掴んだ。

「連隊砲隊に制圧射撃を要請するんだ。目標はさっきと同じでいい」
それだけ命じると鷲峰はまた前を向いて、部下たちに負けないようにM1カービンを撃ちはじめた。

「少尉、良い判断です」

藤堂軍曹が後ろからその声をかけたが、鷲峰の耳には届かなかった。

すぐに四一式山砲が放った榴弾が斜面に着弾し始めた。それを皮切りに山中のいたるところで戦闘が始まった。

マルクトレドヴィッツ 師団司令部

山中での戦闘の音は師団司令部まで届いていた。

「山で始まったぞ。街道からも来るに違いない。偵察隊はどうした！」

辰巳が怒鳴ると、伝令がやって来た。

「偵察部隊がドイツ軍と遭遇。新型ティーガーを含む小規模な機甲部隊を先頭に我が方に突撃してきています」

それを聞くと司令部に詰めていた高級将校たちは青ざめた。街道に配置されているのはティーガーには歯が立たないM4シャーマン戦車である。

「フォード大尉はどこだ！」

街道

林に挟まれた街道を巨大な戦車が突き進んでくる。ティーガ I 重戦車だ。それが10輜ほどで、さらにその後ろに兵士やハーフトラックが続いている。

それに立ち向かう者もあつた。ある四一式山砲装備の連隊砲隊がそうであつた。砲身の先に取り付ける形式の対戦車弾^タを準備して、巧妙に偽装した陣地の中から狙いをすましていたのである。

「撃て！」

指揮官の号令とともに、丸い夕弾が放たれた。それは砲塔正面に見事に命中したが、ティーガーEEにはなんの効果も無かつた。

「糞！正面からじゃ話にならん。陣地転換！」

だがティーガーIIはその暇を与えてはくれなかった。陣地転換のため動く兵士たちとともに連隊砲は榴弾で吹き飛ばされた。

ティーガーを狙う者は他にも居た。戦車壕に車体を隠し、砲塔だけ露出した状態で待機する米軍から貸与されたシャーマン戦車である。シャーマンの装填手は貴重な高速徹甲弾を76・2ミリ砲に装填した。これならば至近距離であれば、ティーガーIIの正面装甲でも貫く事ができるのである。

彼らが待機する陣地の前は曲がり道になっており、ティーガーIIがここを通るならば、必ずシャーマンに比較的装甲が薄い側面を見せることになる。やがてティーガーIIのエンジン音が聞こえてきた。

「用意！」

砲手の照準装置がティーガーIIを捉えた。

「てえっー！」

1000mの距離から放たれた高速徹甲弾がティーガーIIの砲塔側面を貫いた。

「やったあ！虎戦車をやっつけたぞ！」

喜ぶ戦車長だが、喜べるのはそこまでだった。

「敵歩兵接近！」

誰かの声に慌てて確認すると、パンツァーファウストを持った歩兵たちがすぐそこまで迫っていた。

戦車長はすぐに砲塔上に設置された7・62ミリ機銃をドイツ歩兵に向け乱射したが、もう間合いは無かった。1発のパンツァーファウストが放たれ、シャーマンの装甲を貫いた。

マルクトレドヴィッツ 師団司令部

師団司令部には各方面から情報が送られてきたが、どれも芳しくなかった。

「奇襲のため、戦車と歩兵がうまく連携できていないようです。防御線を下げて、態勢を立て直し火力を集中して撃破しましょう」

参謀の1人が進言した。

「うむ。フォード大尉は？」

そこへ起きたばかりらしいフォード大尉が現れた。

「遅れて申し訳御座いません。我が中隊はいつでも出撃可能です」

「よろしい。この位置に展開したまえ」

山中

奇襲効果のため、ドイツ歩兵部隊を完全に阻止することはできなかった。各地で防衛線を突破され、後方に浸透されつつあったので

ある。

鷲峰の部隊はあらかじめ防御態勢を整えることができ、全面から迫る敵を阻止することに成功したが、隣接する部隊が圧倒され、側面がから空きになっていた。ドイツ歩兵はうまくそこに入り込み、鷲峰の部隊にも横から突撃を仕掛けてきた。

「少尉！敵が側面から迫っています」

それに気づいた藤堂が報告をした。

「着剣！」

すでにすぐそこまで迫っている。白兵戦は避けられない。兵士たちはすぐに銃剣を銃口の先に取り付け、白兵戦の構えをとった。

ドイツ兵が突撃してきて、両軍の将兵が入り乱れた。

街道 防衛線

迫撃砲、連隊砲、大隊砲、野砲。あらゆる火砲が放たれ、戦場に落ちる。歩兵は圧倒される中、頑固な装甲を誇るティーガーII戦車は砲撃を突破した。

ティーガーを待ち構えていたのは数輻のM29サムナーであった。ティーガーの戦車兵は見たことも無い新型戦車相手にも果敢に正面から立ち向かった。しかし、それは間違いであった。

強力無比と連合国軍から恐れられた71口径88ミリ戦車砲であったが、300ミリ近い装甲厚を有するM29戦車を相手には分が悪かった。距離800メートルから砲塔正面に放たれた砲弾は見事に弾かれてしまった。次はM29の番である。

「前進！目標！先頭車輛！」

フォード大尉が命じた。戦車が前に進みティーガーとの距離を詰める。強力な105ミリ砲であるが、ティーガーの正面装甲とやりあうにはまだ若干の不安があった。

「てえっー！」

65口径105ミリライフル砲から徹甲弾が放たれた。やはり砲塔正面に突っ込んだが、先ほどの88ミリ砲とは異なり、見事に装甲を突き破った。連合国軍が始めて正面からティーガーII戦車を破壊した瞬間であった。

夜が明けた。

戦い未だ終わらず 5 (後書き)

“戦い未だ終わらず”は次回で終了です。次作は感想欄で提案されていた案を基に英連邦所属の日本を舞台にしたものを投稿するつもりです。

“よ！晴れ男！”

話は変わりますが、今日は岐阜まで出かけて麻生首相の演説を見てまいりました。論点をまとめると…

応援の相手である野田聖子女子の実績をアピール。特に先端技術開発推進の重要性を説いていた事を憶えています

麻生内閣は半年に4回も予算を通して景気対策を実行した。その結果が経済成長率3.7%。英米はマイナス成長、ドイツなども1%台の低成長である。しかし実感が薄い。不況は全治3年。さらなる対策が必要である。

経済だけでなく日本も守る。北朝鮮は脅威である。日本は国連で対北朝鮮経済制裁をリードし、全会一致で賛成を得た。それで国内に法律がないので、北朝鮮船舶臨検法案を提出し衆院で可決したが、参院の民主党のために廃案。民主党に安全保障は任せられない

64年前、日本は焼け野原になり今より酷い状態であった。しかし、今では資源も無いのに経済大国になり、しかも女性が夜に1人で出歩いても安全な治安の良い国である。これは先人たちが“日本は必ず立ち直る”と信じて努力した結果である。

現在の日本は環境技術など世界が欲しがらる技術がある。日本が明るい未来をつくれないうるが、ないはずがない。

細かい表現に違いはあるかもしれませんが、だいたいこんな内容

です。

私は麻生内閣を支持します。民主党だからマシとかそういう理由ではなく、あくまでも麻生総理を支持します。

戦い未だ終わらず 6

1946年8月16日 街道防衛線

休戦発効の期限である正午が迫る中、辰巳師団長は戦場を訪れていた。M29サムナー重戦車に破壊されたティーガーII戦車が無残な姿を晒していた。火力によってドイツ軍の歩兵と戦車部隊の分離に成功した帝國陸軍はM29重戦車の支援を受けて突出したドイツ戦車隊を撃破し、孤立した歩兵隊を掃討すべく反撃に出た。最終的には朝までに失地を回復した。

この夜襲は前線のほぼ全域で発生していた。休戦が発効する前に少しでも多くの領土を取り戻そうとして始めた最終攻勢であったが、友邦ソ連軍の援護も無く、冷戦後の調査でドイツ軍が独断で行なった攻勢であることが明らかになった。疲弊したドイツ軍に大きな戦果を望めるわけもなく、一部を除き最終的には連合国軍に押し返された。

やがて午後0時になった。休戦協定が発効し、第二次世界大戦が終わった。しかし辰巳たちはそれを知らされても喜ぶ気持ちにはなれなかった。並べられた死体袋の前でなにを喜べとるのであるのか？

山中

鷲峰らの籠もる山中の陣地も戦争の終わりを迎えた。予備部隊を投入し浸透したドイツ軍を追払い何とか勝利したが、後に残ったのは両軍兵士の無数の遺体であった。休戦発効は知らされたが、兵士たちの多くは疲れきった表情で遺体の群れの中で立ち尽くしている。そんな中、鷲峰は藤堂軍曹を探しまわっていた。乱戦に突入してから離れ離れになってしまい、休戦をむかえて一段落ついたという

ことで彼を探す事にしたのだ。指揮を次席の下士官である第一分隊長に任せ、歩き回っていた鷲峰はついに見つけた。

見つけた時、藤堂は腹に大きな傷が負っていた。すでに顔に生氣はなく真っ白で、流血は固まり始めていた。明らかに死んでいる。確かめるまでもなかった。

「少尉！」

声のした方に目を向けると神埼が手を振っていた。

「なんとか生き残れましたよ」

鷲峰はなにも心えず、また藤堂の遺体に目を向けた。神埼もその存在に気づいた。

「藤堂軍曹。戦死なされたんですか。彼は4年も戦場に居たそうです。あと少しで帰れたというのに……」

「そうか。4年か。4年もこんなところで戦っていたのか……」

鷲峰があたりを見渡す。終戦間際にして、あと少しで平和な世界に戻れたのにそれをなし得なかった者たちの亡骸。ドイツ兵の遺体の中には勲章が見える者もいる。年配の者もいる。彼らもまた幸運にもこれまでの戦場を生き残り、そして最後の最後に手の届かず散った者たちなのである。

そのドイツ兵の勲章、首から下げる鉄十字章に手を伸ばす者が居た。

「見ろよ！鉄十字勲章だ！本物だぞ！」

手を伸ばした兵士は仲間たちと場違いな声をあげていた。服は真

新しく、とてもあの戦いを切り抜けた者の姿には見えなかった。

「輜重の連中です。片付けに借り出されたんです」

なにかの報告のためだろうか、少尉のところへやってきた第一分隊長が言った。それを聞いた鷺峰は“なにをしなくてはならない”という感情を抱いた。気づいた時にはM1カービン銃を構えていた。

「おい。貴様ら！それは俺たちの戦果だ！」

鷺峰自身も驚くほど大きな怒鳴り声に輜重連隊の兵士たちは驚き彼の方に振り向いた。

「輜重如きが、身に余る行動だ。お前らは自分の仕事を片付けていろ！」

怒鳴られた輜重兵たちは慌てて自分達の割り当てられた仕事に戻っていった。

それを見届けると、鷺峰はM1カービンを下ろして振り返った。神崎と分隊長が揃って、彼に敬礼をしていた。鷺峰は答礼した。

8月15日、ジュネーブ休戦協定が締結され、翌16日に発効した。これにより第二次世界大戦は事実上終結した。締結から発効までの間にドイツ軍が少しでも領土を回復すべく各地で逆襲に転じたが連合国軍は“軽微な損害”を受けたのみでこれを撃退した。

某オンライン百科事典 第二次世界大戦の項目より抜粋

戦い未だ終わらず 6 (後書き)

これで“戦い未だ終わらず”は完結です。

英連邦ニッポン 1 (前書き)

今回は感想欄での発案を基にイギリス連邦日本国世界です。原案では第二次大戦後にイギリス主導で占領という話ですが、それではそれほど変わらないと思うので開国後にイギリスの植民地となり第二次世界大戦後に独立したという設定にしました。

英連邦ニツポン 1

1962年10月21日 東シナ海 ロイヤル・ジャパニーズ・ネイビー 日本王室海軍航空母艦H M J

S <翔鷹> シヨウエウ

空母<翔鷹>はかつてイギリス海軍に所属しくパイオニア>という艦名を与えられていた。第二次大戦中に航空機の補修と補給を行なう航空機整備艦として活躍し、大戦後に本国では用済みとなったので、英連邦傘下の国に売りつけることになったのである。買いつたのは日本であった。

英連邦日本国。1870年代にイギリスの植民地となりイギリス帝国の一角を担った。その後、ロシアが朝鮮半島に進出、占領した為に日本はイギリスとロシアの利権が激突する最前線となったのである。その後、第一次世界大戦と第二次世界大戦に植民地として欧州に兵力を派遣しつつ自治権を拡大していき、第二次大戦後の1947年に独立国となった。まもなく独立15周年を祝う記念式典が首都の江戸で行なわれることになっている。

ともかく独立国となった日本の海軍に配備された<パイオニア>改め<翔鷹>。その任務はソ連の潜水艦を阻止することである。東西冷戦真っ只中の今日の情勢は、イギリスとロシア帝国が激突していた1900年代初めそのままであり、日本の重要性が俄然高まっていた。

その日、東シナ海における哨戒を終えて母港の呉を目指す<翔鷹>機動部隊に來客があった。その人物はシコルスキーS-55ヘリコプターをイギリスでライセンス生産したウエストランド・ホワールウィンドに乗り込み、主力艦載機であるフェアリー・ガネット艦上対潜機の並ぶ甲板に着艦した。ホワールウィンドから降りたのは海軍最高司令官である杉江一三提督であった。

艦橋に案内された司令官は機動部隊司令官の井村少将と対面した。

「いったい何事ですか？提督」

「緊急事態だ。休暇はお預けだ。機動部隊は哨戒任務を継続してもらう」

杉江提督の“休暇はお預け”宣言に艦橋の空気が明らかに重くなつた。井村はその原因に考えを巡らせていた。

「何なんですか？藪から棒に。朝鮮でなにかあつたのですか？報告は受けていませんが」

日本周辺でなにかあるとすればソ連の支配下にある朝鮮である。しかし井村の推測は見事に外れた。

「いや。朝鮮じゃない。キューバだ」

江戸千代田 総督府

「我が空軍がキューバで発見したものはSS-5<サングル>と思われる準中距離弾道弾です。キューバから発射すればワシントンを攻撃できます」

かつて江戸城が建てられた場所に建造された総督府に集められた日本の指導者たちを前にアメリカの駐在武官、ロジャー・マツケンジー少将は本国からもたらされた驚くべき事実を報告した。

集まつた指導者は総督サー・ジョナサン・バロー提督、日本国首相である岸信介、閣僚、それに軍の首脳たちである。

「さらにより大型の中距離弾道弾の存在も確認しています」
「それでアメリカはどのような対応を？」

岸がアメリカの駐在に尋ねた。

「キューバにミサイルを置くことは絶対に許しません。撤去させるために武力行使を含めたあらゆる手段を実施するつもりです」

この言葉は日本の首脳を縮こまらせた。日本に直接は関係のないキューバのミサイルであるが、アメリカがなんらかの軍事行動に出た場合には第三次世界大戦に発展しかねない。そうならば当然、日本も巻き込まれる。

駐在武官はさらに説明を続けた。

「手始めにアメリカはさらなるミサイルの搬入を防ぐため、キューバを海上封鎖することを決定しました。大統領は明後日、それを発表し実行します。貴国にもそれを支持してほしい」

第三次世界大戦への発展もありうる非常時にさすがの岸首相も即答できなかった。

10月22日 蝦夷 陸軍演習場

日本陸軍では毎年秋に北転演習と呼ばれる大規模な演習が行なわれる。つまり本州以南の部隊が戦時を想定し北海道に大移動するのである。北転機動の演習そのものは前日に終了したが、今日は特別に北海道駐留部隊が北転部隊を相手にまわしての対抗演習が追加され行なわれることになった。

臨時の演習にみな不満であると思いきや、北転部隊を除いてやた

らと士気が高かった。それもその筈である。北転部隊は九州・中国地方の部隊からなる師団で、その中には薩摩近衛連隊や長州近衛連隊などの部隊が含まれているからだ。薩長連合は幕末期にイギリスと手を組んで日本植民地化の原因となったのである。植民地時代にも優遇され、その証拠に薩摩や長州の部隊には“近衛”の称号が与えられている。だから多くの日本人が彼らを怨んでいる。植民地時代に冷遇された会津地方などの人間であるならなおさらだ。

会津竜騎兵連隊に所属するセンチオン戦車の戦車兵たちも64口径83・4ミリ20ポンド戦車砲を本当に撃ちこんでやりたい気分であった。

「しっかし、なんでわざわざ臨時の追加演習なんてするんでしょうね？」

ある戦車の砲手が呟いた。

「なにかヤバイことが起きているのかもしれないな」

戦車長が答えた。この時点でまだ現場の兵士たちにはキューバでの異変について伝えられていなかった。

「だが、本当にヤバくなった時には俺たちの出番は無いかもしれないな」

戦車長は遠くに見える建造物、アメリカ軍が日本に貸与している中距離弾道弾ソアの基地を眺めながら言った。

英連邦ニツポン 2

10月23日 宗谷海峡上空

東から太陽が昇り、人々が学校や会社に向かって家を出る頃、千歳ロイヤルジャパニーズエアフォースの日本王室空軍基地を2機の戦闘機が飛び立った。日本空軍の主力戦闘機であるグロースター・ジャベリンだ。スクランブル発進である。イギリス初の本格的全天候型ジェット戦闘機として開発されたジャベリンは主に夜間迎撃作戦に投入されている。

パイロットは地上のレーダー管制に従って目標を追った。やがてジャベリン自身の搭載するレーダーも目標を捉えた。

「デカイ機体だな」

レーダーの反応は大きい。この大きさの侵犯機となると機種は限られる。そしてパイロットの思った通りの機体が空に浮かんでいるのが見えた。

「見えた。目標を目視確認した。間違いない、バジャーだ！」

ツポレフ16、NATOコードネーム<バジャー>は1950年代にソビエトが生み出した革新的な爆撃機の1つで、その存在が知られたときにはボマーギャップという衝撃を西側にもたらした。バジャーは空軍では核兵器を搭載して戦略爆撃機として使われ海軍ではミサイルを装備して対艦攻撃機として利用される。日本に対する領空侵犯をはじめとする各種の示威行動に用いられるのもバジャーなのだ。

「南下している。東京急行のコースだ」

パイロットは管制塔にそう報告すると、継続して追尾するように命じられた。

長距離爆撃機を日本の太平洋岸に沿って南下させる東京急行は珍しいことではなく、空軍のパイロットたちには日常の一部のようなものであるが、それでもここ数日のようにスクランブル回数は極端に増えたことはなかった。

「いったい、なにが起きているんだろっな」
パイロットはキャノピー越しにバジャーのケツを見ながら呟いた。

その頃、アメリカは前日22日の午後7時であった。アメリカ大統領ジョン・F・ケネディは緊急のテレビ記者会見を行い、キューバにソ連のミサイル基地が建設されていることを発表した。アメリカ中の人々が目の前に突然現われた脅威を恐れ、脅えている中でケネディはキューバにミサイルの撤去を断固求め、海軍を駆使して海上封鎖を決行することを訴えた。

「我々が目下のところ選択している道は危険に満ちている、全ての道と同じように。しかし、それは我々の国の気質と勇気、そして世界に対する責任に最も一致するものの1つだ。自由の代償はいつも高い、しかしアメリカ人はいつもそれを払ってきた。そして我々が決して選ばうとしなかった道がある、それは降伏か服従への道である。我々のゴールは力の勝利ではない、正義の証明だ。自由を犠牲にした平和ではなく、この半球の自由と平和の両方が、世界中の、我々の望みだ。主の望むように、このゴールは達成されるだろう。それではありがとうございました。そしておやすみ」

江戸 首相官邸

ケネディ大統領は演説台から降りたのを確かめると、徹夜で首相官邸に詰めている岸首相はテレビの電源を切るように指示した。

「それで首相。どういたしますか？」

国防大臣が岸に尋ねた。同席していた日本総督も黙って岸の返事を待っている。岸首相は一度深呼吸をすると、ゆっくりとした口調で切り出した。

「日本も西側の一員として為すべきことを為さなくてはならない。至急、記者会見の準備だ。アメリカの行動を支持する声明を発表す

る。国防大臣。全軍の警戒レベルを上げるんだ。ソ連軍の行動に注目するように」

「いよいよ日本もキューバ危機と本格的に関わっていく事になるのである。」

日本海 日本海軍T型潜水艦HMS<蛟竜カウリウ>

<蛟竜>はイギリス海軍が第二次大戦中に建造したTボートの1隻で、戦後に日本海軍に貸与された艦である。さすがに旧式化しているので日本海軍はイギリス海軍の最新鋭潜水艦であるオベロン級の導入を検討しているが、配備されるのはまだ先の話である。

「艦長。聴音装置アステックに感あり。潜水艦です」

聴音手の報告に艦長は即座に反応した。

「艦種特定できるか？」

「友軍ではありません。通常動力艦で、おそらく…ソ連艦です」

艦長は追尾を決心した。

日本海 航空母艦HMS<翔鷹>

ソ連海軍太平洋艦隊の潜水艦部隊が一斉に動き出したという報告は<翔鷹>にも伝えられていた。井村司令官はキューバの危機について報告を受け取っていたので、それが意味するところをすぐに悟った。

「やりにくい状況だ」

戦争一歩手前。軍人にとっては一番やりにくい状況である。平時であれば距離を保って最低限の礼儀を示せばいい。戦時なら撃沈すればいい。だが今は平時でなく、また戦時でもない。戦時ではないので攻撃を加えることはできないが、平時ではないので艦隊の安全を守らなくてはならない。

井村提督は彼を待ち受けているであろう状況を考えて、頭を痛め

ていた。

英連邦ニツポン 3

10月25日 日本海 HJMS<翔鷹>

日本海軍機動部隊は相変わらずソ連潜水艦の追跡を続けていた。ソ連の潜水艦の雑音は大変騒がしいので、追跡は容易であった。

「<桶狭間>から報告。目標丙はズールー級です」

<桶狭間>はイギリスのバトル級駆逐艦を基に第二次大戦中に建造された日本海軍の主力駆逐艦の1隻である。114ミリ連装高角砲2基とスキッド対潜臼砲を装備して空母護衛の任についている。

「ズールーにフォックストロット…通常艦ばかりですな。虎の子の原潜は出てこないのか…」

艦長が葉巻を片手に言った。

「なにか原子力機関に問題を抱えているのかもしれないな。それともキューバ沖に集中したいので太平洋では事を荒立てたくないのか…」

後世で判明した情報によると、どうやらその両方であったようだ。

この日、地球の裏側 まだ現地では前日の24日であるが 海上封鎖部隊がキューバ沖に展開していた。第136機動部隊の名称を与えられた封鎖部隊は空母8隻を含む延べ183隻の艦艇を動員した大艦隊であった。さらにアメリカ戦略空軍はデフコン2を発動し、672機の戦略爆撃機と381機の空中給油機が空中待機なしいし出撃待機の状態になった。アメリカ合衆国はいよいよ戦闘態勢を整えたのである。

空母司令部には新たな報告が入った。それは艦載機であるフェアリー・ガネットの編隊からの報告であった。“世界一醜い航空機”とも称されるガネットであるが、レーダーを装備して外気を吸引するために浮上した潜水艦を追跡する能力があった。

「ガネット部隊が潜水艦の潜望鏡らしきものを発見しました。位置は……」

通信士が報告するとともに、広げられた海図の上に新たにソ連潜水艦を示す駒が置かれた。駒の数は9つになっていた。

10月26日 江戸 首相官邸

岸首相と首脳陣はニューヨークの国連特使から現地で行なわれている安全保障理事会の緊急会議について逐一報告を受けていた。ソ連のゾーリン特使は反米気質の強い第三世界の国々の支持を得て会議を有利に進めていた。

「不味いなあ」

岸は呟いた。国連の場でソ連の主張が押し通されれば、日本がアメリカ支持の立場を固持するのも難しくなるだろう。

特使の言葉によればアメリカがキューバにいかにも不当な圧力をかけているかを力説するゾーリンの前に、アメリカ特使のステイブソンはたじたじになっているように見えたという。

「おい。今後の対応について再検討する必要があるかもしれない。緊急閣議の準備をしておいてくれ」

岸首相は隣に座っている官房長官に指示を出した。しかし、その間に地球の裏側で行なわれている緊急会議の流れは変わりつつあった。

同刻 ただし現地時刻では10月25日 ニューヨーク 国連本部

ソ連のヴァレリアン・ゾーリン特使はアメリカの行動の不当性を訴えていた。アメリカの特使アドレー・ステイブソンはソ連の非難に顔を歪ませながら耐えていた。

そしていよいよアメリカ特使の演説時間がやってきた。アメリカの反撃の始まりである。演壇に立ったステイブソンは先ほどまでとは打って変わって自身ありげな表情になっていた。

「それではゾーリン特使。貴方は、キューバにはソ連の弾道ミサイ

ルは存在しないとおっしゃった。間違いありませんか？」

ステイブソンソンの質問にゾーリンが首を振った。

「そのとおりだ。ミサイルは存在しない」

それを聞くとステイブソンソンは笑みを浮かべた。

「では、いったいこれはなんなのでしょうか？」

ステイブソンソンは写真が印刷されたパネルを会議室内に集まった各国の代表に見せつけた。それはU-2偵察機が捉えたミサイル陣地の拡大写真であった。会場中がどよめき、ゾーリン特使も心底驚いたという表情をした。この時、ゾーリンはキューバのミサイルの存在を知らされていなかった。

「ゾーリン特使。簡単な質問に答えていただきたい。キューバにソ連の弾道ミサイルは存在するのか？YesかNoか？通訳はいらないでしょう？」

ゾーリンはこの時、返すべき答えを持ち合わせていなかった。それが真実なのか、それともアメリカが世界を騙すべくおこなった謀略なのか分からない。下手な発現をすれば、祖国ソビエトの外交的な信用を失う事になる。

「その答えは、議論の結果としてやがて明らかになるでしょう」

ゾーリンのはぐらかしの言葉にステイブソンソンは首を横に振った。

「貴方がそういうおつもりであるのなら、私は答えを地獄が凍りつくまでお待ちしましょう」

その様子を見た者全員が確信した。アメリカの勝利だ。

英連邦ニツポン 4

東部標準時 10月26日午前7時
キューバ沖

アメリカ海軍駆逐艦ジョン・R・ピアースの艦橋で艦長は心の中に生じている恐怖と不安を部下に見せまいと必死になっていたが、うまくはできなかった。周りの乗組員も艦長の落ち着かない様子に緊張を高めている。

別に目の前を進む“敵”が怖いというわけではない。相手はただの貨物船である。ピアース号を沈める武器など搭載してはいない。

問題は、その船がソ連船籍でなにかを積んで封鎖中のキューバに向かっているという事実であった。彼らは昨日午後5時にアメリカ海軍の封鎖海域に侵入し、ピアース号が追尾を続けていった。キューバに向かう船に対しては臨検を実施し、合衆国に脅威となる物品を載せていないかどうか検査をしないといけない。命令に従い既に大統領に対して強制的な停船と臨検を実行する許可を求める通信を送っている。大統領からGOサインが届けば、それはただちに実行される。

ここでピアース号の乗組員が対応を少しでも誤れば、そのまま第三次世界大戦に発展しかねない。乗組員は誰しもが自分の故郷にソ連の核ミサイルが落下する瞬間を思い浮かべては神に祈った。そして誰もが自分たちの名前が歴史に残らないことを願った、第三次世界大戦の第一撃を実行した者として。

そこへ通信員が受領した通信文を手に艦橋へやって来た。
「艦長、ペンタゴンより直接命令です」

ペンタゴンにはマクナマラ国防長官と海軍作戦部長ジョージ・アーンダーソン提督が待機しており、大統領の命令が彼らを通じて直接伝達されることになっている。

艦長は通信員から通信文を奪い取るように受け取ると、芽を通し

た。予想通りの内容であった。

「これよりソ連貨物船を臨検する。停船命令を出せ」

スピーカーを通してロシア語が使える乗組員による停船勧告が流される。しかしソ連貨物船はまるで何事も無かったかのように進みつづける。

「よし、威嚇射撃だ」

艦首の5インチ連装砲がソ連貨物船に向けられる。

「撃て！」

ソ連貨物船の上で照明弾が燈った。

同刻 蝦夷

日本空軍所属のキャンベラのほぼ全ての機体が出撃待機状態であった。目標は当然、ソ連であり、千歳基地の部隊にはハバロフスクが目標として与えられていた。

連日、低空侵入訓練を繰り返したパイロット達の緊張は俄然高まっていた。

「やっぱ戦争になるのかな？」

そんなパイロットの1人が呟いた。

「まさか。さすがにフルシチョフもアメリカに本気で喧嘩を挑もうとは考えないだろう」

同僚が言った。

「だが、何事にも予想外の出来事ってのはあるもんだぞ？」

国防総省

「射撃を止めろ！」

「撃ち方止め！撃ち方止め！」

ペンタゴンの司令センターでは怒号が飛び交っていた。発端はピアース号からソ連貨物船に向けて“射撃”を行なうという内容の通信を受け取ったことであった。

「どういうつもりだ！攻撃には大統領の命令が必要だと言った筈だ

ぞ！」

マクナマラ国防長官の言葉にアンダーソン提督は顔を顰めた。

「攻撃はしておりません。威嚇の為に照明弾を発射したのです」

それを聞いた国防長官は途端に身体の緊張が抜けて、へたりこんでしまった。その様子を見たアンダーソン提督は子供に諭すような口調で告げた。

「国防長官。我々には臨検についての実績と経験があります。どうぞ心配なさらず、黙ってみていただきたい」

それで国防長官を納得させたつもりアンダーソンであったが、ようやく落ち着きを取り戻した当のマクナマラは再び怒鳴り声をあげた。

「なにが実績と経験だ。君の艦隊はソ連船に発砲したんだぞ」

「それは貴方の勘違いです。駆逐艦はソ連船の上に向けて発砲したのです」

アンダーソンは毅然とした態度で答えた。マクナマラは溜息をつくと、先ほどのアンダーソンのように諭すような口調で提督に語りかけた。

「なるほど。確かに私の勘違いだ。だがソ連の方も私と同じ勘違いをしたらどうする？」

その言葉にアンダーソンは顔色を変えた。その可能性を失念していたようだ。

「我々は全面戦争か否かの瀬戸際に立っているのだ。射撃は大統領の許可が必要だ。照準が船体に向けられているように、船体の上に向けられていようと」

アンダーソンは不服ではあったが、マクナマラの主張を認めざるを得なかった。

「分かりました」

英連邦ニッポン 4 (後書き)

というわけで割り込み投稿機能を使って久々に続きを投稿してみました。

オペレーションC・C・C（前書き）

深海「あれ？英連邦ニッポンはまだ終わってないだろ？」

神楽「いやあ、この後のストーリーがなかなか煮つまらなくてねえ。

結局、一時中断だつてさあ。まあ気長お待ちください」

深海「・・・」

オペレーション・C・C・

皇紀2670年（西暦2010年）の春先、大日本帝國中をある二ユースが震撼させた。

『中華人民共和国が正規空母建造を正式に発表。2020年までに機動部隊を実戦配備』

昔から中国海軍に注目をしていた者は驚きはしなかった。中国が空母保有を目指しているのは公然の事実であったし、露骨に對外進出へと方針を改め遠洋海軍への道を歩む中国海軍にいかにも立ち向かうかは帝國海軍にとって重要な関心事であった。中国が太平洋、東南アジアへと進出しようというのなら膨大な海洋利権を有する日本との衝突は必至であり、関係者は長年その準備を進めていたのである。

しかし世間は違った。マスコミは中国の空母建造をセンサーショナルに煽り、まるで明日にも中国と日本の間で戦争が勃発するかのよう報じたのである。人々は中国の覇権主義に脅え、軍事支出拡大に後ろ向きな現政権に批判の矛先が向けられた。日本中がある種のヒステリーに襲われたようであった。

そのような世間の動きに時の政権も反応せざるをえなかった。帝國議会の主要7政党のうち、4党から成る連立政権はそれまでの方針を改めて来年度より軍事予算を大幅に増加させること決定した。それとともに関係各所に中国の覇権主義に立ち向かう最善の方法を提案するように呼びかけた。それは秘密裏に指示されたものであるが、いくつかの提案は外に漏れた。例えば“東南アジア諸国との連帯を強めて、各国の防衛力整備には力を貸すべきである”“それらの国々が日本の兵器の導入を望むのであれば、積極的に応じるべきである”と言ったものだ。

日本全体が中国との新たな“戦争”に向けて動き出していたのである。

その日、ある政府関係施設の中ではパーティーが開かれていた。会場の正面には『C・C・作戦成功記念式典』と垂れ幕が張られていた。作戦を実行したCIRO 内閣情報調査局 において実行責任者である三輪明博は参加者を代表して挨拶をすることになった。

演壇の前に立った三輪は一礼して挨拶を始めた。

「皆さん、皆様方の厚い支援のお陰でC・C・作戦は最終段階に達しました。その点につきまして実行責任者として感謝の意を表したい」

会場に集まった参加者から拍手が沸き起こった。C・C・作戦、それはCIROが主導して前代未聞の対外工作作戦であった。

作戦の概要はこうである。まず中国の現地工作員が空母推進派の人民解放海軍将校と接触して支援・指南をする。さらに空母非推進派にはスキヤンダルを用意して失脚させる。さらに中国でも発達しつつあるインターネット網でも空母保有を訴える世論を形成させる。さらに外務省の外交官には中国関係者と接触した際には“いかに空母の存在が外交上有用であるか”をさり気なく伝えるようにさせる。こうした様々な工作活動の結果が、中国政府の発表だったのである。空母建造が中国の明確な政府方針となった。こうなってしまうえば作戦は9割がた成功である。

「中国海軍が空母の建造を始めるということは、他より実戦的、より脅威となる兵器システムに投入される資源が減少することになります。例えば潜水艦。例えば台湾海峡を勢力圏に収める強力な陸上航空部隊、例えば大兵力を輸送可能な水陸両用戦部隊であります。これらの戦力は我々が最も警戒すべき兵力であります。しかし、空母への資源集中により、それらの兵力の整備は鈍ることは間違いありません」

空母という兵器システムがいかに金食い虫であり、海軍にとって大きな負担となるかはフランス海軍が如実に示している。かの国の水上艦隊は空母へのリソースのために戦わずして壊滅的な状況にな

っている。また欧州には小型空母を保有している国が多いが、NATOであるとかEUであるとか多国間同盟に頼らなければ有効な艦隊を組む事ができないのである。そういった事例を見れば空母の保有が必ずしも海軍力の増強にならないばかりか、結果として海軍そのものを弱体化させるかもしれない諸刃の刃であるということは明らかなのだ。

「我々が最初にこの作戦を提案した時、ある海軍将校はこう断言しました。『中国が空母機動部隊を建造したとしても、帝國海軍は十分にその行動を封じることができる』と。さらにこつも言いました。『現在の中国海軍の対潜能力の水準を考えれば、帝國海軍は「中国近海に原潜を1隻配備している」と記者会見すれば、中国海軍機動部隊は外洋に出るのに慎重にならざるをえなくなる』とも言いました」

それもまた歴史の経験によって裏付けられた言葉であった。かつてイギリスに奪取された島嶼の奪還を試みたアルゼンチンの試みは、空母まで保有するアルゼンチン海軍の作戦がたった1隻のイギリス原潜に古い第二次大戦型の巡洋艦が撃沈されただけで頓挫したことにより崩壊したのだ。

半永久的な水中作戦行動を保障する原子力機関を搭載した潜水艦が行動しているかもしれない 本当に行動している必要さえない！

海域は水上艦隊にとつては地雷原も同じである。本当に危険かどうかは実際にそれを踏んでしまった時にしか分からないのだ。しかも潜水艦は地雷と違って自由に移動でき、しかもずっと賢い。

それは中国に立ち向かわなくてはならない帝國海軍やアメリカ海軍も同じである。中国海軍の潜水艦隊の質的・量的な増強こそが日本やアメリカの最も恐れる状況なのだ。それに比べれば少数の空母はずっと対応しやすい相手である。

「かくして我々は作戦に踏み出すことができたのです。その結果、我々は我が帝國の国防力、抑止力を実質的に向上させることができました。これほどまでに明確に、しかも鮮やかに成功した謀略作

戦を私は知りません」

三輪は心の中で“ついでに軍の使える予算も大幅に増えました”と考えたが、口に出しては言わなかった。公式 非公然の作戦に公式もへったくれもないが には、この作戦の目的はあくまで“増大する中国の海軍力を平和裏に削り、帝國軍の抑止力を実質的に向上させる”ことであり、国防予算のかさ上げはあくまで副次的効果とされている。しかし、作戦計画に軍から出向して参加した者には後者も同じくらい、ないし、より重要な目的と考えていた筈である。

勿論、空母機動部隊を建造するしないに関係なく中国の軍事予算は増加し続けているが、国防問題に関心のない多くの臣民にとってそれは何万光年先で起きた出来事と同じことなのだ。それよりアフガニスタンやイラクで、一部の識者が言うところの“アメリカの犬に成り下がって”それが日本の国益にとって重要な派兵であることとは当然のように無視された 泥沼の死闘を続ける事への関心と批判が大きく、臣民は軍事費の増大には否定的な世論を形成している。というわけで軍備予算獲得には中国の軍備拡大を象徴するようなシンボルが必要であったのだ。かつて冷戦時代にソ連脅威論のシンボルとなつた空母ミンスクのような。

さらに三輪は会場の奥まつたところに造船業関係者が集まっているのにも気づいた。日本と異なり海軍力、空軍力とも十分とは言えない東南アジア諸国は中国軍の空母保有をより実質的な脅威と捉える筈である。そして、手っ取り早く海軍力を底上げする手段となるのは潜水艦戦力の増強だ。潜水艦調達の相手に日本を選ぶ国もあるだろう。遅れをとっている日本の造船業者もドイツとロシアが多勢を占める潜水艦市場に食い込むいい機会に違いない。

「それでは我が帝國の安泰を祝して、乾杯！」

様々な人々の思惑が絡み合い動き出したC・C・作戦、すなわち チャイナキャリアー 中国空母作戦。それがどんな未来を日本にもたらすが、まだ誰も知らない。

ラスト・カウボーイ（前書き）

これは昔、某大型匿名掲示板のあるネタスレ 簡単にいえばWW
2に日本が勝っていたらというスレ の中にあつたある興味深いレ
スを小説化したものです。

ラスト・カウボーイ

6年目に入った第二次世界大戦は最終局面に達しようとしていた。ドイツは全欧州を制覇し、宿敵スターリンを討ち取って東方生存圏を完成させた。日本は東南アジア諸国を欧米列強から解放し大東亜共栄圏の建設にむけて万進している。欧州で最後まで枢軸国に抵抗していたイギリスまでも講和の道を選び、三国同盟は遂に予先をアメリカに向けたのである。

昨年6月に実行された日本陸海軍によるカリフォルニアへの上陸作戦“大君主”は成功を収めアメリカ大陸への足掛かりができた。一方、カナダではケベックが独立を宣言しドイツと同盟を締結した。すぐにドイツ軍が送り込まれ、アメリカは東西から枢軸国に侵攻されることになったのである。

富嶽による戦略爆撃で工業基盤を着々と破壊されたアメリカは急速にその軍事力を低下させ、次第に後退しつつあった。そして日本軍は遂にロッキー山脈を突破して、ひたすら西を目指していた。軍の首脳部では既にアメリカとの戦争よりも東海岸を順調に制圧する独伊軍との競争をより重視していた。誰もがアメリカとの戦争はもう終わったものとして見ていた。

その日、笹川大尉率いる自動車斥候隊はダラスを出発して一路、メキシコ湾岸最大の都市であるヒューストンを目指していた。彼の斥候隊を親部隊である第32軍はメキシコ湾沿岸の油田地帯制圧が命じられており、運がよければ笹川隊は日本軍で初めてメキシコ湾に到達した部隊となる栄誉を授かれることになる。

今、車列は道路脇に停まっていた。偵察隊を派遣して前方の障害

を確認するためである。笹川大尉は車列の中心を進む専用の九五式小型車の助手席に座り、地図を睨んで部下が偵察をしている一帯になんがあるが見定めようとした。彼らの行く先にあるのは森の中を通る道と、それを見下ろす丘と、その頂上にある小さな小屋である。

偵察隊を率いる少尉はここ最近の連戦連勝にすっかり酔っていて、ここが戦場であるという事実を忘れかけていた。彼は首から双眼鏡をぶらさげて軍刀を振りかざし、いかにも指揮をとる将校という出で立ちであった。

森が開けて、丘の頂上が見えた。少尉は双眼鏡を手にして、立ったまま小屋を覗いた。

「少尉殿。危険です！」

少尉付の下士官が警告したが遅かった。小さな破裂音のような音とともに少尉の頭から血が噴出し、そのまま倒れてしまった。さらに近くに通信兵も撃たれて倒れる。

「敵襲！敵襲！」

少尉付が倒れた通信兵から無線機を奪い取ると、すぐに送信ボタンを押した。

「敵の狙撃兵の攻撃を受けています！」

笹川大尉も車中で銃声を聞いた。そこへ中隊本部付の無線手が駆けつけた。

「偵察隊が狙撃を受けています」

笹川は無線の受話器を通信手から強引に取ると、相手に状況を尋ねた。

「狙撃位置は分かるか？援軍が必要か？」

「小屋に狙撃手がいるようです。完全に圧倒されています」

「分かった。牽制射撃で圧倒しろ。増援を送って包囲する」

笹川は受話器を返すと、機関短銃を手に九五式小型車の助手席から駆け下りた。その後ろでは無線を傍受していたのか、小型車に続く自動貨車トラックから兵士たちが次々と飛び降りて並んでいた。

「第1小隊は円陣防御を敷き敵襲に備える。第2小隊は続け」

兵士たちはきびきびとした動作で動き出し、第1小隊は車列を取り囲むように配置につき、第2小隊は篠山に続いて森の中へ飛び込んで行った。

小屋の前で釘付けにされていた偵察隊の兵士は半自動小銃を小屋に向けて乱射したが、なんの手応えも無く、逆に狙撃が続き、その場を動かこうとした兵士は次々と倒されていった。

森の中を増援部隊が笹川大尉を筆頭に全力で進んでいた。すると笹川に続いていた通信手が突然、身体力が抜けて倒れた。笹川が立ち止まって様子を見ると、首に銃創が出来ていてそこから血がドクドクと流れていた。

「敵襲！伏せろ！」

笹川の叫び声が合図であったかのように四方八方から銃弾が撃ちこまれ、増援部隊はその場で釘付けにされた。兵士たちは半自動小銃をあちらこちらに乱射するが、狙撃手には届いていないようで狙撃は一向に止む気配がない。

これは偶発的な遭遇ではない。敵は計画的に待ち伏せていたのだ。そう確信した笹川は倒れた通信手から無線機を奪い取ると、街道に残る小隊と連絡をとった。そして彼らを通じて、自動車斥候隊の後ろから追走しているはずの砲兵隊に連絡を取った。

「至急、砲撃を要請する」

姿の見えぬ狙撃手を制圧する最善の手段は、その狙撃手がいると思われる一帯を丸ごと吹き飛ばすことだ。

すぐさま砲兵隊が援護射撃を開始した。数門の九一式10センチ榴弾砲の射撃は正確無比で、笹川の指示に基づいて孤立した小隊を取り囲むように砲弾を撃ちこんだ。そして狙撃もそれに従って止んだ。

砲撃が収まると、伏せていた兵士たちが立ちあがり一斉に狙撃手の居たあたりに突撃を仕掛けた。彼らは次々と米軍の狙撃兵の死体を発見した。しかし、発見した兵士はなぜか皆、困惑してその場に立ち尽くした。

「どうした？」

笹川がそんな敵狙撃兵の周りに集まった兵士の群れの1つに駆け寄った。

「隊長、こいつ子供ですよ」

「なんだって？」

笹川が敵兵の死体を覗いてみると、確かにそれは14〜5歳の子供に見えた。手には古いレバーアクションライフルが握られている。「こんな銃で…他のもそうか？」

その問いに答えが返ってくる前に、再び銃声が響いた。

「遠藤！」

笹川は他の兵士とともにその場に伏せると隊で一番の狙撃兵の名を呼んだ。呼ばれた遠藤一等兵は敵の銃撃に怯むことなく戦場を駆けて来た。

「狙撃手を倒せるか」

自分の横に伏せて狙撃の姿勢をとる遠藤に笹川が尋ねた。

「少し静かに」

遠藤は敵がいると思われる方向に九九式狙撃銃の銃口を向け、用心金に指を添えた。するとまた向こうから銃声が聞こえてきた。

「こいつはあまり上手くない」

遠藤はそう呟いてから、引き金に指をかけた。敵を捕捉したのだ。照準眼鏡越しに敵を睨みつけ意識を集中する。そして彼は引き金を引いた。

銃声が響くとともに、狙撃手の方向からドサという音が聞こえてきた。すると茂みの中で何者かが立ち上がった。その姿は笹川もはつきり捉えることができた。

「止めを刺すんだ」

遠藤の放った弾は狙撃手の肩に当たったらしく、左肩を手で押さえ、笹川らに背を向けて逃げようとしている。しかし隣で銃を構える遠藤は第二弾を撃とうとはしなかった。

「どうした遠藤。なぜ撃たん！」

「あれも子供ですよ」

指揮官の詰問に遠藤は呟くように答えた。

撃たれた狙撃手は森の向こうに消えた。それを確認すると遠藤が立ちあがり、それに笹川も続く。それで緊張感が途切れたらしく遠藤はハアハアと荒く息をし始めた。笹川はその様子を黙って見ている。これ以上問い詰めるつもりはなかった。

「敵も相当追い詰められているな」

ただ一言、それだけ呟いた。それから振り返って彼と同じように立ち上がり始めた部下達に視線を向けた。

「よし前進だ」

暫く進むと問題の小屋が見えた。第2小隊の面々は森の縁に身を隠して待機した。笹川は無線機に手を伸ばした。

「サクラ3、こちらサクラ2。小屋を確認した。狙撃手を確認したか？」

<サクラ2、こちらサクラ3。屋根裏部屋にいるのは間違いない。>

窓から閃光が見えた。だが姿は見えない>

笹川は双眼鏡を構えて小屋の屋根を眺めた。屋根には四角の形の切り込みらしきものがある。あれを内側から持ち上げてつかえ棒で支えるタイプの窓なのだろう。こちら側のそれは閉まっているが、反対側は開いていて火点になっている。

「よし。こっちから一斉射撃を行なった狙撃手の気を逸らす。その隙に窓に擲弾を撃ちこめ」

<了解。交信終わり>

茂みに隠れて狙撃に耐えていた斥候小隊の面々にもようやく希望の光が見えてきた。斥候小隊を指揮する下士官は投擲手に擲弾を準備するように命じた。

命令された兵士は擲弾発射用に配備された三八式歩兵銃を構えて、その銃口の先端に一〇〇式擲弾器を被せた。擲弾器は小銃弾の発射ガスを使って手榴弾を射出する装置で、一〇〇式は九九式手榴弾を200メートルほど先まで飛ばす能力があった。兵士はそれを小屋の屋根の窓に向けた。

第2小隊の兵士が一斉に飛び出して半自動小銃を小屋に向けて乱射した。すると第2小隊側の窓の板が動いた。

「今だ！」

笹川が無線機に向かって叫んだ。

擲弾器を装着した三八式を構える兵士が立ち上がった。銃口は開け放たれた窓に向けられている。引き金を引くと、擲弾器の筒から手榴弾が放たれ、放物線を描き飛んでいった。そして窓の中に吸い込まれるように入った。

笹川は開きかけた窓 おそらく狙撃手が様子を伺っているのだから、爆風によって限界まで上がり、またボタンと音を立てて閉じるのが見えた。その向こうの閃光とともに。

「呐喊！」

兵士たちが一斉に小屋めがけて走りだした。笹川が先頭を歩き、

小屋の扉を蹴飛ばした。

その先には男が1人居た。その足元には大量の小銃らしきものが転がっていて、男はその1つを手にして笹川に向けようとした。しかし笹川は素早く自動短銃を構えて連射した。8ミリ弾は見事に敵兵を捉えて倒した。

笹川は倒れた敵を蹴飛ばして死んでいることを確かめた。このときに初めて敵兵が外の狙撃手たちと同じように小さな少年であったことに気づいた。彼のまわりに転がる銃は全て旧式のマスルローダー前装銃のようであった。

「装填をしていたのか？」

小屋に続々と兵士たちが入ってくる。すぐに天井裏に繋がる梯子を見つけて上っていく。

「隊長！敵の狙撃手を発見しました」

その声に促されて笹川は梯子を上った。そこには1人の少女と1人の老人が倒れていた。老人の方はマスキット銃を構え、銃口は窓に向けられていた。少女の方は両手に1丁ずつ前装銃を握っていた。1つはライフル銃で、もう1つはマスキット銃のようであった。

「この老人が狙撃手で、下の少年とこの少女が装填作業をしていたようです」

笹川は部下の説明に頷くと、老人の握るマスキット銃に手を伸ばした。

「こんな銃で我が帝國陸軍部隊に立ち向かったというのか」

森の中を走る者が居た。幼さの残る顔立ちの少年で、レバーアクションライフルを持ち赤く染まった肩を手で押さえている。遠藤一等兵が逃がしたあの狙撃手である。

森を抜け、小さな川に出ると橋の上に立ち止まりライフルを川の中に投げ捨てた。そして向こう岸に渡り、そこに建つ空家に飛び込んだ。

その一番奥の部屋に駆け込むと扉を閉めて、少年は部屋の隅に座り込んだ。そこで緊張感が途切れたのか、身体の力が抜けて泣き出した。少年はただ泣き続けた。

大東亜戦争末期。アメリカにおける本土決戦によりアメリカ陸軍の組織的抵抗はほぼ粉碎された。しかし進撃をする日本軍の前に立ちはだかった者たちが居た。祖国を守るべく立ち上がった市民兵たちである。

彼らは“最後のカウボーイたち”は最低限の訓練を受けただけの少年兵と老兵が大半を占めたが、地形を巧みに利用した奇襲戦法により日本軍を最後まで苦しませたのである。

カサンドラの風車 1 (前書き)

たまにはこちらも更新

巷で流行っている(?) 日本まるごと異世界召喚ものです

カサンドラの風車 1

エウロペ大陸カサンドラ地方

新世界八大陸の1つ、エウロペ。その東半分のうち西側7割を領土とするのがエフタル連邦で、37の領邦と12の自由都市、そして中央政府の直轄領から成る連邦国家である。

その領邦の1つ、ホーレン公国はエウロペ大陸の北岸に面し、西は連邦直轄領オスト・リーシャと接する。オスト・リーシャはエウロペの西半分を占める超大国、帝政マケドニアとの国境に面している。マケドニアとの対立関係にあるエフタル連邦にとってはまさに最前線である。当然ながら最前線の後方地帯であるホーレン公国は連邦政府とその同盟国にとっても重要な地域であった。

ホーレン公国の様子を見てみると、古くからの街には我々の知るところの中世ヨーロッパを思わせる煉瓦建築の街並みが続いているが、郊外にはコンクリート造りの建物が並んでいるのを見ることができる。それこそがホーレン公国が進める近代化政策の成果であった。

沿岸部のカサンドラ地方に建設されたホーレン全域で消費される電力 と言ってもその消費量そのものは微々たるものであるが、70%を生み出す巨大な風力発電プラントを中心に様々な近代的工場が建てられた。同盟国から進出してきた企業もある。かくしてホーレンには多くの産業と雇用が生まれ、エフタルの中でも経済的に恵まれた地域となった。

こうした発展は開明的で近代化を推し進める領主のホーレン公による働きもあるが、中央政府と連邦最大の同盟国であるニホン帝國の支援があつてこそだ。風力発電プラントとはじめとする様々な新技術と施設は全てニホン帝國の技術援助によって完成したのである。

ニホン帝國は様々な並行世界より転移した国々や土地が集まったこの新世界において七大主要国に数えられる大国である。その本土

はエウロペ大陸の東の海上にあり、面積的に見ればエフタルよりもずっと小さな国であるが1億を超える人口とエフタルの数世紀先を行く技術力、工業力を持つ恐るべき国である。

ニホンから持ち込まれた資本、技術、そして学問は中世の如き後進国家であったエフタルに近代の風を吹き込み、この国の発展に大きく貢献したのであるが、誰もがそれを歓迎していたわけではなかった。

特にそれまで産業を牛耳っていたギルドに身を置く旧来からの保守的な商工業者、国政と密接に交わり多くの特権を享受していた貴族や宗教指導者たちにとって留学生などを通じて持ち込まれたデモクラシーや政教分離、自由経済などの新思想を重大な脅威として受け止めていて、各地でニホンやそれと通じる開明派と対立していた。カサンドラ地方もそんな火種を抱える地方の1つであった。

カサンドラではこの頃、謎の“病気”が蔓延していた。夜になってもなかなか寝付けず、頭痛に悩まされ、またすぐに感情的になるようになり平穏だった村でも喧嘩が絶えなくなつたという。多くの住民が衰弱し、憔悴しきつていた。このような有様に頭を痛めたのはカサンドラ伯爵家の現当主マルティン・ハルトリーゲルであった。ハルトリーゲル家はカサンドラ伯の称号からも分かるように、かつては 大転移の起こるよりはるか前の話である。カサンドラ地方一帯を領土とする領邦の主であった。しかし今から200年前の帝政時代末期に1000以上も乱立していた領邦の再編が行なわれ、その際にカサンドラはホーレン公国に編入されてしまったのである。だから、今はホーレン侯爵に仕え従属する領邦等族の身分に甘んじている。それでもマルティンは歴史あるハルトリーゲル家に誇りを抱き、かつての領邦君主という家柄を汚さぬように日々努力をしていた。

またマルティンは典型的な保守派貴族の1人であり、ニホンやニ

ホンから持ち込まれる様々な物資、学問に不信感と嫌悪感を抱いていた。特にデモクラシーという政治思想が彼にはまるで理解できなかった。無知な平民が政治を動かしても碌な結果になるわけがない、というのが彼の考えだ。

彼の主であるホーレン公は二ホンの援助を得て近代化を推し進める開明派の1人であったので、転移から2人は対立することが多くなっていた。マルティンにしてみれば、ホーレン公が風光明媚で知られるカサンドラの景観を台無しにする風力発電プラント建設を推し進めたのは、彼に対する嫌がらせとしか思えなかった。

そしてプラントの周辺での謎の病の蔓延である。マルティンは我慢の限界に達しようとしていた。

マルティンは従者を引き連れて馬に乗り、病の流行っている沿岸の村を訪れていた。村には既に先客が居た。エフタルで最大勢力を誇る宗教、エトナ教会の司祭であった。

馬から降りるとマルティンは司祭の横に立った。

「お久しぶりです。司祭様」

司祭は村の背後に立つ巨大な風力発電用風車を凝視していた。

「おぞましい光景だ」

「神をも恐れぬ所業です。歴代皇帝より“比肩するものなし”と称えられたカサンドラの海が汚されている。その上にこの病騒ぎだ」

村人たちは普段の生活を維持し、営みを続けようとしているのはつきりと見てとれた。しかしマルティンは村人の数が前に来た時より減っていることに既に気づいていた。村に残っている人々の表情も暗く、疲れきっている様子だ。

マルティンはそんな様子を見て心を痛めていた。

「司祭様。一体、なにが原因なのでしょう？どうして神は我々にこのような試練をお与えになるのでしょうか？」

そう司祭に問うマルティンであったが、心の中ではもうその原因

を見つけていた。司祭に尋ねたのはその答えの確信を得るためであった。

「間違いない。ニホン人の所為だ！奴らの所業に神が怒っているのだ！」

司祭の叫び声が村の中に響く。それを聞きつけたのか村人の一人が司祭とマルティンのもとへ駆けて来る。

「大変だあ！テオが錯乱したあ！」

村人はそう叫びながら2人の前にやってきて、司祭にしがみついた。

「司祭様！助けてくださいえ！」

司祭とマルティンはその村人に案内されて、村のはずれにやって来た。そこでは暴れる1人の男を村人達が必死に押さえていた。暴れる男の手には包丁が握られている。その近くには何人が血を流して倒れていた。

「なにがあつたんだ。この男はどうしたんだ？」

マルティンが案内してくれた村人に尋ねた。

「分かりませんよ。突然、暴れ始めたんです」

そうしている間にも村人達は男の手から包丁を奪い取った。しかし男がおとなしくなる様子はない。

「悪魔の声だ！悪魔の声が聞こえるんだ！」

叫び声をあげて、押さえる村人たちを振りほどこうとしている。

村人たちは男の口に布切れを詰め込み黙らせると、そのまま近くの納屋まで引き摺っていった。納屋の扉が閉められると、司祭とマルティンを案内してきた村人が口を開いた。

「こんなことは始めてだ。どんどん酷くなっています」

司祭とマルティンは沈痛な面持ちで村人の訴えに聞き入っていた。村人があらかた言いたいことを言い終えると、マルティンは手を伸ばして村人の背中をさすってやった。

「辛かったろうに。安心しろ。私は神を冒瀆するものを絶対に許さない」

マルティンは周りを取り囲む村人たち1人1人の顔を見回した。誰もがマルティンの次の言葉を待っている。

「ニホンにはこの報いを必ず受けさせる」

決然と宣言するマルティンの背後で巨大な風車は廻りつづけていた。

カサンドラの風車 1 (後書き)

オチがなんとなく分かつちやっただ人もいるかもしれませんが、感想欄などでのネタバレはしないようお願いします

カサンドラの風車 2

エフタル連邦首都ノイエ・ゼンターレン

“エウロペの穀物倉”とも称される農業大国エフタルの首都は以外にも洋上の島にあった。島は元々エフタルの領土ではなく、“大転移”とみなが言うようになった大異変を経て無主地となりエフタルに編入されたものである。

どうしてそのようなところに首都を設けたかという点、簡単に言えば特定の領邦君主への贖罪にならないという配慮だ。なにぶんエフタルは領邦と自由都市の集合体であり、その政府は領邦君主や自由都市指導者たちの連合組織という色彩が濃い。そのような状況で既存の領邦や都市に首都を設ければ、その地域の指導者を贖罪したと受け止められかねず政府指導者層の人間関係に縛れが生じる可能性があるというのだ。外から見れば情けないと感じるかもしれないが、当の本人たちにしてみれば極めて真剣な問題である。

エフタル連邦は国というより主権国家である領邦の同盟のようなもので、中央政府というものは“大転移”前には存在しなかった。数百年前まではエフタルを束ねる皇帝がいて、エフタル帝国は地域の大国として君臨していたが、皇帝の血統が途絶えて大空位時代が続き、なし崩し的に帝国は崩壊して領邦は独立国のような立場になった。そして、そういった独立した領邦を束ねる帝国の後継として生まれたのがエフタル連邦である。

連邦が主体となって領邦の再編が行われた歴史上の事実からわかるように、我々が考えるような主権国家と国際機関という図式を単純に当てはめることも出来ないが、連邦が主権国家として振舞っていないかったのも事実である。

そうした状況が変わったのは“大転移”後である。強力な軍事力を有する大国、帝政マケドニアと国境を接して脅威に直面し、領邦連合組織では対応に限界が生じるようになったのである。同盟国で

ある大日本帝國の要請もあり、その支援の下で中央集権国家が推し進められることになったのだが、急激な変革には様々な問題が伴った。前述の首都問題もその一つである。

また即席で中央政府を創った影響は国家元首の称号にも表れている。帝國時代も含めれば千年以上の歴史を有するエフタルにも関わらず、現政府の元首は“政府首班”という味気ないものなのだ。

当初は皇帝の復活も考えられたものの、帝冠を新皇帝に授ける役目を果たすべきエトナ教最高指導者と“大転移”によって完全に断絶されてしまったためにお蔵入りとなった。最高指導者の居るエトナ教聖地はエフタル国外にあり、新世界に出現しなかったのだ。

大統領はしつくりこない。仕えるべき君主がいないのに首相というのもおかしい。かくしてエフタル中央政府の指導者はなし崩しのに政府首班を名乗ることになった。なお政府首班というのは日本側の意識であり、中央政府指導者を示すエフタル語を直訳すると“政府の代表”になる。

ともかく、様々な紆余曲折を経てエフタル連邦の首都に収まったノイエ・ゼンターレンは旧世界におけるワシントンDCやブラジリア、キャンベラのような首都となるべく生まれたい計画都市であり、今は首都に相応しい都市となるべく日本からの資金的技術的援助と元々の現地住民の労働力を得て開発が進められている。そうして建設されたものの1つにノイエ・ゼンターレン国際空港がある。

島のはずれにあるノイエ・ゼンターレン国際空港はエフタルに今のところ2つしかない国際空港の1つで、日本の国際空港にも匹敵する近代的な設備が設置されている。

その空港の3000メートル級滑走路に着陸しようとする旅客機があった。日本の最大手航空会社のJAT日本航空輸送の塗装が施された双発大型ジェット機だ。日本航空機製造(注1)YS-100。日本が最初に開発した大型ジェット旅客機である。日本の航空界の総力を結

集して国際航路就航を目指して各国の航空会社に売り込みがなされたが、ボーイングとエアバスという二大企業が寡占する大型旅客機業界の壁は厚く売り込みは失敗。空軍と国内の大手航空会社が救済措置として購入した以外にはほとんど実績がなく、生産中止寸前の機体であった。

状況が一変したのは“大転移”後である。なにしろ日本の、いや世界の民間航空の世界を牛耳っていたボーイングもエアバスも消えてしまったのだ。そして日本が容易く入手できる大型旅客機はYS-100に他ならなかったのである。

思わぬ需要に大いに潤った日本の航空産業は生産拡大、新型開発と投資を拡大していった。なにしろ彼らの目の前にはまったく未開拓の市場が広がっているのだから。“大転移”に巻き込まれた国家の技術・産業レベルは様々である。未だにレシプロ航空機が主力の国もあれば、エフタル連邦のように産業革命すら経験していない国もある。しかし、いずれはこれらの国にも多くの航空路線が開設され、ジェット旅客機が飛び交う時代が来るに違いない。うまく立ち回れば新世界のボーイングやエアバスになることができるのだ。

だがライバルがないわけではない。日本より遅れた国がたくさ
んいる一方、同等ないし一部分野では上回っている国はいくらも存
在する。最大のライバルは主要七大国の1つに数えられるローラシ
ア連邦共和国の航空産業である。彼らは大型旅客機の生産能力を持
ち、彼らの旧世界では大きなシェアを占有していた。経験も規模も
日本のそれよりずっと巨大であった。

新世界において確固たるシェアを確保するためにも、ローラシア
との本格的な競争が始まる前に自国周辺の地盤を固める必要を感じ
た日本政府と航空産業は周辺諸国に次々と航空路線を開設し、日本
製航空機の売り込みをはじめたのである。

しかしながら日本の周辺国は将来性はともかくとして発展途上国
ばかりである。政府の支援があるとはいえ収益が乏しい航空便を多
く開設する必要を迫られた日本航空輸送にしてみれば貧乏くじを引

かされたも同然である。けれども、それまで往来が不便だった地域へと航空便が就役したことで多くの外交官や輸出入業者が恩恵を与ったのも事実である。

商工省の外局、資源電源局に属する官吏、とのむら よしお殿村義雄もその恩恵に与った1人で、もしノイエ・センターレン空港がなければ乗り心地の悪い軍用輸送機に便乗するか船舶を利用するしかなかったところを、彼は快適にすばやく任地に赴くことができたのである。彼に与えられた仕事はカサンドラ地方で発生した風力発電プラントをめぐるイザゴザの解決である。

“大転移”。それは今から10年前ほどに起きた国家単位での大規模な時空移動現象である。なにが原因かは誰にも分からないが、ともかくそれは起きた。大日本帝國は異世界へと飛ばされてしまったのだ。

そうした不運に直面した国は日本だけではない。様々な平行世界パラレルワールドから多くの国が転移して1つの新たな世界“新世界”が形成されたのである。

“新世界”に出現した国々は様々である。政治制度も技術レベルも文化レベルも様々であった。

日本のように議会制デモクラシーを採用している国もあれば、専制君主が牛耳る国や絶対主義国家もある。主権国家という概念さえ確立していない封建的な国や国とさえも言えないような氏族の集合体も存在している。

コンピュータ時代を迎えてジェット機が飛び交う国もあれば、レシプロ機が航空の中心でモーターゼーションもあまり進んでいないという我々が知るところの第二次世界大戦以前レベルの国もあった。産業革命を経験していない国も多い。

国の規模も様々で、前述のロシアのように人口が数億に達して大陸1つを丸ごと国土にするような国も存在すれば、日本の市町

村にも及ばないような小さな国も存在する。

こうしたまったく違う世界に存在した国々が突然に元の世界と断絶してひとつに世界に集まったのだから、その混乱ぶりは窺い知れる。貿易が絶たれ必要な物資が輸入できなくなり、未知の国々が突如出現したのであるから。

日本は幸いにも、後に“エウロペの穀物倉”と称されることとなる農業国エフタル連邦と多くの鉱物資源や石油に恵まれたラップランド共和国が隣接していたために最悪の事態は免れたが、日本に匹敵する文明レベルを持ちながら必要な資源を絶たれて崩壊した国もある。そうした無政府地帯はブロークンランドと呼ばれて各地に生じ、地域の問題となつていいる。実のところノイエ・ゼンターレンもそうしたブロークンランドの1つだったのである。

最初の混乱を乗り越えたと各国とも調査隊を派遣して、新世界の状況が次第に把握されるようになった。特に日本のような先進諸国はいち早く結びつき、“大転移”の2年後には南方の島国ゼーランド王国の首都オクタードに各地域の中核となる大国の代表が招かれて国際会議が開かれた。招かれたのは大日本帝國、ロシア連邦共和国、バビロニア、プカラ王国、カーペンタリア共和国、大華帝國の6カ国である。

このオクタード会議では主権尊重、法治主義と人権尊重、自由経済・自由貿易、集団安全保障による国際平和の四原則を謳ったオクタード宣言が採択された。そして宣言に賛同する諸国が集まり翌年にはオクタード条約が締結され、かつての国連のような機能を持つ“新世界”初の普遍的国際機関であるオクタード条約機構が創設されたのである。その加盟国は61を数える。

そしてそれを主導した最初のオクタード会議参加国は以降、オクタード7と呼ばれて“新世界”を主導していくことになる。

かくして“新世界”の基礎となるオクタード体制と呼ばれる国際秩序が形成された。しかし、それに賛同した国もあれば反発した国もある。その代表格がエフタルとラップランドを間に挟んで日本と

対峙している帝政マケドニアだ。

対立の舞台となったエウロペ大陸は事実上の冷戦状態であり一瞬触発の状態が続いているのである。

注1 日本航空機製造

日本の主要航空機製造会社の合資で誕生した大型飛行機製造メーカー。

元々は1940年代に後半に軍需省が企画した旅客機開発計画に端を発する。なぜ軍需省がそのような計画を始めたかといえば大戦終結による軍用機生産の縮小を見越して、戦時中に拡張した生産設備に戦後も引き続き仕事を与えて航空産業の衰退を防ぐため、一種の公共事業であった。

しかしながら軍事偏重で発展した日本の航空産業では単体で欧米の民間航空業界に太刀打ちするのは難しく、国内の航空会社が連合する必要が迫られた。こうして誕生したのが日本航空機製造であり、現在でも大型機の開発は軍民間わず日航を通じて行われている。

カサンドラの風車 3

ノイエ・センターレン国際空港

殿村は入国手続きを終えてロビーに下りた。広い割には人が少ないロビーで彼を1人の男が待っていた。殿村の名前が書かれた画用紙を掲げる背広姿は同じく日本政府に雇用された官吏のようであった。相手の方も殿村に気づいたらしく手を振っている。

「資源電源局の殿村義雄だ」

相手の前に立ち、スーツケースを床に立てて姿勢を正すと殿村は右手を差し出した。相手は彼の右手を握り、握手を交わした。

「日本大使館の穂村諭吉ほむらゆきち、二等書記官です。今回はわざわざお出でいただきありがとうございます」

そう言つて穂村は殿村のスーツケースを持って、出口に向かって歩き出した。

「どうぞ」

穂村について空港施設を出ると、その先には黒塗りの高級車が止まっていた。大使館の車のようだ。穂村が後部座席のドアを開けて、手で示して殿村に乗り込むように促した。殿村が乗り込むと、穂村はトランクにスーツケースを載せ、それから運転席に座り発進した。走り出すとともに殿村は早速切り出した。

「それで、そんなに深刻な事態なのか？」

今回、殿村に宛がわれた任務は“説得”である。日本政府の援助で完成した発電プラントの周辺で奇病が流行り、地元の有力者がプラントの撤去を求めているのだという。表向きは被害調査に来た殿村であるが、本当の目的はその有力者を説得して撤去の要求を撤回させることになる。

「交渉に赴いた地元に住在する領事の話ですと、相当殺気立ってたようです。その有力者、カサンドラ伯爵は保守派の1人で元々、日本主導の近代化に批判的なようでした」

穂村の説明を聞いて殿村は苦笑した。

「なるほど。それで難癖をつけてきたというわけか。これは厄介なことになりそうだな。そもそも病気というのは本当なのか？」

「領事も実際に現地を視察しまして。確かに異常な状態であったとこちらで呼んだ医師の診察は拒絶されましたが」

「それは怪しいな」

実のところ、このような事例はこれが初めてではない。保守派の貴族や宗教家たちは日本の勢力を追い出そうと事件を起こす例はいくらであった。その中には毒物を使い病気を広め、日本人がやつてきたために神の怒りに触れたなどと言い張ることもあった。だから日本政府や大使館員の大多数は今回のことも冷ややかに見ていた。ただ穂村は違ったようだ。

「ところで、発電プラントのために本当に病気が発生したということとありえないのでしょうか？」

「恐る恐る尋ねる穂村に対して殿村は断言した。

「ありえない。あれは日本の安全基準にもクリアしているし、この手の開発には煩い環境NGOからもお墨付きを貰ってるんだ」

「そうですね。現地には明日、飛んでもらいます。今夜は大使館で大使に説明していただくこともあるので」

「そうこうしているうちに駐エフタル日本大使館の前に到着した。

車は海軍陸戦隊が守るゲートを抜けて、建物の正面入り口前に停車した。穂村はトラックから荷物を降ろし、後部座席のドアをあけた。「ようこそ。日本大使館へ」

ノイエ・ゼンターレン 駐エフタル日本大使館

大使の執務室で殿村は大使に握手を求められた。

「わざわざ内地からすまんね」

大使は外務省の官吏出身ではなく前政権により抜擢された公爵家

当主であつた。封建体制の影響が色濃く残るこの国で公爵は地元の有力者と良好な関係を築けているようだ。

「仕事ですから。カサンドラ伯爵というのはどのような人物なのですか？」

握手を交えながら尋ねると、大使の顔は暗くなつた。

「はつきり言つて保守派の中でも特に頑固な男だよ。教会との繋がりも強い」

「宗教が絡むと碌なことはありませんからな」

殿村がなにげなく言うと、傍らで2人の会話を聞いていた穂村が顔色を変えた。

「殿村さん。外でそういうことを口外しないでくださいね。この国の人たちは信仰心は強いですから」

「ああすまん」

殿村は口ではそう言ったが、内心では穂村の忠告を鬱陶しく思っていた。無神論者を自任する殿村としては、やたらと信仰を振りかざす人間がどうも気に入らなかつた。

ホーレン公国 合同大練兵場

翌日、殿村は再び機上の人となつていた。穂村とともに乗る日本航空輸送便のビジネスジェットはエフタル連邦北部、ホーレン公国にある日本陸軍練兵場内の飛行場を目指していた。

エフタルは“エウロペの穀物倉”と称えられているのは前にも述べたが、それは主にエフタル南部の話である。北部地帯は気温が低く農耕にあまり適しておらず、一部の作物を除いて農業はあまり盛んではない。広大な平原があちこちに広がっていて、牧畜が主要な産業であつた。

そうした平原に目をつけたのが内地の狭い練兵場に悩む日本陸軍である。“大転移”前はアメリカのヤキマ演習場などに遠征して国

内の練兵場不足を補っていたが、今はそういうわけにはいかない。そこでホーレン公爵から沖縄本島にほぼ匹敵する面積という広大な土地を借用して、巨大な練兵場を開設したのである。

この練兵場では長距離砲をほぼ最大射程で撃つことができるので、内地ではほとんどできなくなった実弾射撃演習が可能である。さらに内地から経験豊かな教官を集めて編制した仮想敵部隊、教導第一旅団が常駐しており実戦に近い演習を行うことができるのだ。

内地の日本陸軍部隊の他、同盟諸国軍にも開放されている。それ故に“合同”大練兵場だ。地元のエフタル軍、それにエウロペ大陸東部の東側3割を領有する資源国家ラップランドが主に利用している。

しかしながら、見返りとして様々な開発支援が行われているとはいえ広大な土地を他国に占有されることはエフタル人の自尊心を大いに傷つけることになり、保守派が日本主導の近代化に反対する理由の1つになっている。

さて、広大な練兵場には様々な施設が併設されている。飛行場もその1つで、開設の目的は練兵場へと演習にやってくる陸軍将兵による利用である。内地からここを訪れる陸軍将兵は空軍の航空輸送便に乗って、事変を想定した緊急展開訓練も兼ねてここまでやってくるのだ。しかしエフタル北部はインフラ建設が南部ほど進んでおらず交通の便も悪いので、民間企業や関係省庁の要請もあり飛行場は民間航空便にも開放されている。

殿村と穂村は機内では特に会話を交わすことなく時間が過ぎた。やがて機内から合同大練兵場の飛行場が見える空域に差し掛かり、穂村がそれを殿村に説明した。機内での最初の会話だった。練兵場の中の飛行場だということで本国の離島にあるようなこじんまりした飛行場を想像していた殿村は、その大きさと充実した設備に驚いた。長大な複数の滑走路に、大掛かりなターミナルビル。まるで内地の国際空港を見ているようだ。

「マケドニアと開戦した場合には、ここが前線部隊と内地とをつな

ぐ兵站拠点の1つになりますからね。事変発生時の緊急脱出拠点にも指定されていた筈です」

つまり非常時には一帯に居る邦人がここに集まって内地に逃げ帰るのである。

「凄いなあ。まるで砦のようだ」

そうこうしているうち、2人を乗せたビジネスジェットは着陸アプローチに入った。

カサンドラの風車 3 (後書き)

本文中に沖縄本島とほぼ同じ大きさの演習場とありますが、沖縄の面積は約1207平方キロメートルです。広すぎだろうと思う人もおられるかもしれませんが、陸上自衛隊がよく遠征するアメリカのヤキマ演習場が1311平方キロメートル、同じくアメリカ陸軍のナショナル・トレーニングセンターは2590平方キロメートルの広さを誇るらしいです。

ちなみに陸自最大の演習場である矢臼別演習場は168平方キロメートル。まさに桁が違います。

カサンドラの風車 4

ホーレン公国 首都ペトナ

大練兵場に降り立った殿村と穂村は早速、公国政府が遣した車に乗り込んでホーレン公の待つ宮殿へと向かった。殿村はそこが今日の寢床になると教えられた。

その日はホーレン公との折衝で終わった。明日、カサンドラ伯爵がここへ陳情にやってくるという。そこで殿村は彼を説得しなくてはならない。ホーレン公の彼に関する説明はこれまで聞いてきてことをほぼ同じだったので、ほとんど聞き流してしまった。ただ“神を冒瀆する発言をしないでほしい”というホーレン公の言葉が妙に心に残った。

そして翌日、カサンドラ伯マルティン・ハルトリーゲルの一行がペトナの宮殿を訪れた。何台もの馬車が連なり、直属の使用人たちや武官、大量の荷物を持ち込んでいた。

「まるで大名行列だな」

窓から馬車の車列を覗いて殿村が言った。

「あれを見てください！」

殿村の横から覗いていた穂村が馬車からマルティンとともに現れた男を指し示した。

「あの格好はエトナ教会の司祭ですよ」

それを聞いて殿村は毒づいた。

「ややこしくなってきたな」

全ての事柄がこれからの会談がどう足掻いても宗教が絡んでくることは明らかであることを示している。無神論者の殿村には耐え難い会談になりそうである。

それから2人の部屋の戸をホーレン公の使用人が叩いた。

「会談の準備が整いました」

殿村と穂村は豪華な装飾が施された会議室に案内された。日本の役所の無機質な部屋に慣れた2人には息苦しく感じた。部屋の真ん中には大きなUの字型のテーブルが置かれていて、既にカサンドラ伯マルティンとエトナ司祭は席についていた。2人はその反対側の席に案内され、真ん中にホーレン公が座った。

会談が始まると、マルティンは早速、核心を突いてきた。

「私がホーレン公と日本政府に求めるのは発電施設の迅速なる撤去である。我が所領になんの益ももたらさないばかりが、領民を苦しめるものが存在することを容認はできない」

外交儀礼もなにも挟まずのいきなり直球に殿村も穂村も目を丸くした。2人は目配せした後、殿村が代表して意見を口にした。

「カサンドラ伯爵。我々、日本政府としてはまず状況を把握しなくてはなりません。本当に疫病の原因が発電プラントなのかも分かりませんし。政府が私を派遣したのはあくまで被害調査が目的なのです」

殿村の説明をマルティンは鼻で笑った。

「状況を把握？貴国の自慢の最新技術とやらは、この程度のことも把握することができないのですかな？」

それから彼は机に拳を叩きつけて、強い口調で言った。

「状況は明白だ。議論する余地はない。時間稼ぎやら止めていただく」

「そうおっしゃられても…」

殿村は続けて調査が必要なことを説明しようとしたが、今度は司祭が割り込んできた。

「わしは聖職者として各地を巡り、神の言葉を聞き、人々の様子を見てきたが、このような事態は初めてじゃ。お前達が造った発電プラントとやらが神の怒りを買ったとしか思えん」

それを聞いた殿村はため息をついた。彼は司祭に対する嫌悪感と懐疑心を隠そうともしなかった。

「冗談は止してください。今回の疫病は神とは何の関係もありません。そして、おそらく発電プラントもです。それとも今回の疫病を宗教と結びつける必要があるのですかな？」

司祭への疑念を含ませた殿村の言葉にマルティンは激昂した。

「貴様！司祭様を侮辱するつもりか！」

その光景を見て穂村は顔をしかめ、頭を抱えた。

「皆さん、落ち着いてください。お互いの誤解を避ける為にも、まず原因の調査でしょう」

穂村が間に入ってマルティンはようやく怒りを収めた。しかし両者の間には埋めがたい溝ができてしまった。

「いいでしょう。ぜひともご覧になっていただきたい。あなた方が持ち込んだものがいかなる災厄をもたらしたか」

マルティンの案内で問題の村を視察することになった。殿村と穂村は公国政府の車に乗り込むと早速出発したのであるが、到着はまだまだ先になりそうだ。なにしろマルティンの一行は馬車である。

その行列に続く車はなかなか速度を出せない。

「まったく。車くらい買ったらどうなんだ？」

なかなか進まない車列を車窓から覗きながら殿村は苛ついていた。「そりゃ向こうは近代化反対派なんですから」

穂村はその横で殿村を宥めようと彼の背中に語りかけていた。

「それに、この国のほとんどの人にとっては車つてのは手の届かないものですからね。馬車なんて珍しくないですし、こうやって馬車があるせいでスピードが出せないなんてよくわかることですよ」

宥める為にエフタルの状況を伝えた穂村であったが、それがかえって殿村の怒りに油を注ぐことになった。

「日本政府はそういう状況を改善する為に発電プラントをはじめとする政府開発援助をしてきたんじゃないか。なんであんな風になれなくてはいけないんだ？」

殿村の言葉を聞いて穂村は黙り込んでしまった。突然静かになったことに驚いた殿村が慌てて振り向くと、彼は静かに考え込んでいた。

「確かに難しい問題ですね。エフタルもいずれ新しい文明や技術を受け入れなくてはならなくなるでしょう。そうしなければ行き詰ってしまいますから。しかし、当人達の意味を無視しても良い結果が得られるものではないでしょう」

真剣な表情で語る穂村を前に殿村は怒りを忘れてしまっていた。

「当人達の意味はどうであれ、発電プラントが病気の原因つてのは間違いだ。俺はそれをはつきりさせるだけだよ」

しばらく車の中に奇妙な沈黙が流れた。沈黙を破つたのは穂村だった。

「その…発電プラントと病疫が関係ないつてのは確実なんですか？」

「何度も言うが、あの発電プラントは政府は勿論、国内の環境NGOからもお墨付きを貰っているんだ。有毒ガスとか出さない。勿論放射能もだ。原発とかと違ってクリーンなエネルギーだからな」

「クリーンですか」

穂村にはその言葉が妙に気になった。

「どうも、あの震災以来、風力とかソーラー発電がやたらにもてはやされて、問題の洗い出しとかそういう段階を経ずに推し進めすぎな気もするんですけどね。熱狂しすぎというか」

話が妙な方向に進んでいるのを感じたのか、殿村は路線修正を試みた。

「こつちも聞きたいんだが、病疫は奴らの仕業だと思つか？」

「奴らつて？」

「エトナ教だよ。俺達日本人を追い出すために病気やら災厄やらを自作自演する事例もあるんだろ？」

「どうでしょうかねえ？」

穂村はまた黙って考え込んでしまった。しばらくして再び口を開いた。

「なんとも言えません。あの司祭に関しては詳しいことはまだよく分かっていないんです。カサンドラ伯の方はそういうことをする柄ではないんですけど」

「結局、なにも分からないってことか」

それから会話はまた途切れてしまった。

車列が問題の村に到着する頃には日付が変わっていた。

カサンドラの風車 4 (後書き)

感想欄でご指摘いただいた誤字を修正しました。

カサンドラの風車 5

カサンドラ地方

殿村がエフタルの大地に降りたつてから4日目の朝を迎えていた。2人は深夜に到着してからカサンドラ伯の私邸の一室を借りて一夜を過ごした。エトナ教会によるテロ活動を恐れていたホーレン公国政府が派遣したボディガード 日本をはじめとする各国の退役軍人が創設した民間軍事会社から雇った傭兵である が2人の部屋を守り、朝食を用意していた。

傭兵の作った朝食の味は“食べれなくはない”という程度のものでマルティンの用意した料理の方が美味しい食事を用意できたであろうが、毒を盛られる可能性を考えれば妥協せざるをえない。2人はその食事を平らげた。

朝食を終えると殿村と穂村はマルティンの案内で問題の疫病が発生した村を視察することになった。問題の村に到着すると、村の向こうに巨大な発電プラントの風車が見えた。

案内された村は確かに酷く寂れていた。人々には覇気がなく、みんな死んだような目をしている。ホーレン公国政府の用意した通訳を通じて殿村と穂村は村民から聞き取りをしてまわった。

「それでどのような症状が出たのですか？」

穂村が尋ねると、村人は自分のおかれた症状について必死に説明した。

「夜に全然眠れなくなったんだ。頭の中では何かがガンガン鳴ってうるさいし、身体はだるいし、全然仕事になりやしないんだ」

「あれが出来てから村の空気が悪くなった。前はみんな穏やかで平和な村だったのに…喧嘩が絶えないようになった。みんな些細なことですぐに怒り出すんだ。なあ、平和な村を返してくれ！」

村人達の訴えはどれも切実なものであった。殿村と穂村は聞き取りを終えると、風車がよく見える高台の上に向かって、それぞれ聞

いた話について報告しあった。

「聞く限りでは、疫病そのものが嘘という感じはありませんね」

穂村が指摘すると殿村は頷いた。

「ああ。とてもではないが演技には見えない。なにかが起きているのは間違いないだろう。詳しくは専門家に尋ねないと分からんが」

「なんで専門家を連れてこなかったんですか？」

当然の疑問を口にする穂村に殿村は言った。

「俺の仕事は伯爵殿を説得することだ。調査はあくまでも建前だよ。殿村の本音に穂村は露骨に嫌そうな顔をした。それを見た殿村は弁解するように続けた。

「それにあの発電プラントは大規模だが既存技術で建設されたものだ。内地でも、もっと小規模だが、実績はある。こんな問題が起きたことは無いんだ。有害物質が放出されるとか、そういうことはありえない」

しかし穂村は殿村の話を聞いているのかいないのか、じっと黙り込んで向こうに見える発電プラントを眺めていた。

「おい。どうした？」

殿村は声をかけるが反応しない。肩を叩いて、もう一度呼びかけると、ようやく殿村の方に振り向いた。

「おい。どうしたんだ？まさかお前まで病気になったなんて言うなよ」

「いや。凄い迫力だなと思って」

穂村はそう言って回り続ける風車を指した。

「ゴーって音が耳に響いて。まるで自分が風車に飲み込まれてしまふんじゃないかって気分になるんですよ」

殿村は彼の言葉を聞いてため息を吐いた。

「それは錯覚だよ」

「分かっていますよ。そう感じるってだけです」

それから言葉が途切れ、2人を沈黙が支配した。それを打ち破ったのはマルティンの従者の声だった。

「トノムラ殿。ホムラ殿。旦那様がお呼びです」

それを聞いた殿村と穂村は互いの顔を見合わせた。殿村は穂村にニヤリと微笑んでみせた。

「さあ。説得の始まりだ」

高台を降りるとマルティンが2人を待っていた。

「それで相談は終わりましたかな？」

マルティンは慇懃無礼な態度で尋ねた。殿村は説得という自分の任務を考えて下手に出た。

「はい。早速ですが、あなたとの会談に臨みたいのです」

「いいでしょう。案内しますよ」

マルティンは自ら殿村と穂村を自分の私邸まで引き連れて行った。

私邸内の会議室に2人を案内した。会議室には殿村と穂村、マルティン、そしてエトナ教会の司祭が残った。最初に口火を切ったのはマルティンだった。

「我々が望むことはただ1つ、発電プラントの即時撤去です」

迷いの無い態度で明言したマルティンに穂村は気後れした。しかし殿村は引き下がるつもりはなく、丁寧な口調で言い返す。

「私にはその権限はありませんし、問題の疫病が発電プラントに端を発するものと確認できたわけじゃありませんし。我々の援助活動は地元の皆さんがより豊かな生活を送れるように願ったものなので」

殿村の言葉にマルティンは眉をひそめた。

「豊かな生活？日本の価値観を我々に押し付けることがか？それもコロナ変わる訳の分からない？今は友愛社会だったかな？」

エフタルの保守派達が日本の進出に反感を抱いている理由は既得特権を失うといった実利的な問題のみではない。日本流の近代化の

推進は保守派にしてみれば日本がエフタルの伝統や生活様式、価値観を見下し、破壊しようとしているようにも見えたのである。

さらに日本で政権交代が起り内閣が変わって“エフタル近代化”の方針が修正されたことが彼らの怒りに拍車をかけた。前政権はエフタルを日本製品の市場とすることを目指して経済成長を軸とした近代化を推し進めた。道路や鉄道、発電施設といった経済成長に不可欠な社会インフラが支援の中心となり、同時に教育制度整備の支援も行われていた。それに対して新政権は“人が人らしく生きるこゝとができる市民による友愛社会”なる意味がよく分からない目標が掲げられた。新政権がエフタルをどうしたいのかよく分からないが、エフタルの価値観を重視しなかったのは同じだったし、経済成長に必要なインフラ整備向けの援助資金を削減して闇雲に金や物資をばら撒く手法は、エフタル人を愚民化して援助漬けにしようとしているように見えて余計にたちが悪いと感じさせた。

「我々はエトナへの信仰を糧にして日々豊かな生活を送っている。君達の手助けは不要だ」

「あなたがたが信仰の厚い人々であることはよく理解しているつもりです。生活が便利になれば領民の皆さんもより教会に多くの時間を割けるようになりますよ？」

それを聞いてマルチンはフンと鼻をならした。

「今は病の為に民の多くが教会どころではないようですがね。領民が豊かな生活を送れるように発電施設を早急に撤去していただけませんか？」

意見を曲げるつもりのないマルチンに殿村は別方向からのアプローチを試みた。

「ですから、私にはその権限はありませんし、原因究明にはさらなる調査が必要です。現政権はあの発電プラントのようなクリーンエネルギーの推進に熱心でして、皆さんに満足していただけられるような様々な支援を用意する筈です」

「つまりどういふことかね？」

「新たな政府開発援助や投資がこの地域に投入されると思います。日本政府は皆さんのために最大限のバックアップをするつもりです」
マルティンはため息をついた。

「それはつまり、賄賂ということかね？舐められたものだ」
「そういうつもりでは…」

「繰り返して言うが、我々の要求は発電施設の撤去だ。あれが病の原因であり、脅威の元凶だ。それ以外にすべきことはなにもない」
殿村は頑固なマルティンの態度に舌を巻いた。説得には長い時間をかける必要があるそうである。

「ですから、あのプラントが疫病の原因だと決まったわけではありませんから…」

そこへ今まで黙って二人の会話に耳を傾けていた司祭が口を挟んだ。

「しかし、あのプラントが出来る前にあんな病気は一度も起きなかつたのだ。それがプラントが出来るとともに流行した。あのプラント以外に如何なる理由があるというのだ！」

「ですがあのプラントは我が国の安全基準を全てクリアしており、あなたの言うような危険を監視する市民団体からもお墨付きを得ているんです。それに日本の現政権は風力発電施設を全国に広めようとしているんです。そんな危険な代物ならそんなことを進めるわけが無いじゃないですか。そのような疫病の原因になるとは思えません」

「ならば神の意思と考えるべきだ！」

司祭が神の名を出すと、殿村は顔を顰めて露骨に嫌な顔をした。穂村はやたらに宗教を持ち出す司祭に対して無神論者の殿村が我慢の限界に達しようとしていることに気づいた。司祭は構わずに話を続けた。

「神が二ホンの言う“進歩”とやら否定して排除するように求めているのだ」

その司祭の言葉を聞くと、殿村は一度、穂村の方を振り向いた。

穂村は変な笑みを見せた殿村に危険を感じた。そして止める暇も無く、それは現実になった。

「神の意思？貴方の意思ではなくてですか？」

会議室の空気が凍りついた。

「それは、どういう意味だ？」

震える声で尋ねる司祭に殿村は冷たく言い放った。

「ご存知ですか？我が国の援助による近代化に不満を持つ一部の聖職者が毒物を用いて疫病を演出し、我が国の進出が原因だと騒ぎを起こした事例があるんですよ」

カサンドラの風車 6

ホーレン公国首都ペトナ

「やっちまったなあ」

殿村はベッドに腰掛けて頭を抱えていた。その様子を穂村は冷ややかな視線で見つめていた。

結論を言えば説得は完全に失敗した。その原因は聖職者を侮辱するような殿村の言動である。そのために会談は決裂してお開きになった。殿村が事の重大さに気づいたのは日が沈み、ようやくペトナに戻った頃であった。外交官として穂村は殿村の軽率な発言にあきれ果てていた。

「あなたが居る限り、カサンドラ伯爵は交渉に応じないと思いますよ」

穂村の指摘に殿村は「だよなあ」とため息をついた。本国に交替要員を要請すれば、殿村が出世コースから外れるのは間違いないだろう。

「とりあえず明日、ホーレン公に相談してみますか」

穂村は次善策を提示すると、殿村は早速飛びついてきた。

「そうだな。きつといい知恵を貸してくれるだろうな」

そのすがる様な殿村の表情は穂村にはえらく情けなく見えた。会談の時の強気はどこに消えたのやら。

その頃、マルティンは殿村に頼られていたホーレン公と向き合っていた。

「ホーレン公。それでも貴方はあの不信心者どもの言うとおりにするのでしょうか？」

殿村の言葉は司祭とマルティンを酷く傷つけ、怒らせていた。だから殿村たちと一緒にペトナへとホーレン公に直訴しにやって来た

のだ。

「君の言いたいことは分かるが、しかし彼らの資本や技術は我が領土の発展に不可欠だ」

「領民を犠牲にした発展などにどんな価値があるのでしょうか？ 奴らは信用できません。奴らは疫病は司祭様の仕業だと言い張ったのですよ！」

マルティンの語った殿村の言動は改革派のホーレン公も動揺させた。

「それは本当なのか！」

「はい。私は司祭様が信頼できる人物であると約束しました。司祭様も身の潔白を訴えました。私達はそれを神に誓ったのです。しかし、あの日本人はそれを信用に値しないと語ったのです！」

信心深いエフタル人にとって“神に誓う”とは大変重い言葉である。それを否定するのは最大限の侮辱だ。

「奴は神を信じていないのです。エトナ教会の信者ではないという意味ではありません。あらゆる神を信じていないということです。その意味が分かりますか？」

信心深いエフタル人が最も恐れるのは異教徒ではなく無神論者である。信仰心を持つ者はどんな信仰にしろ、信じる神を超えることはできない。決して超えることの出来ない一線というものが必ずあるのだ。しかし信仰を持たぬ人間にはそれがなく、時に自らが神であるかのごとく振る舞いかねないのだ。

「あの者も、それにあの者の背後にいる者たちも何を企んでいるか分かったものではありません。日本人との関係を清算すべきなのですよ」

必死に訴えるマルティンに対し、ホーレン公は深呼吸をして心を落ち着かせて冷静に言い聞かせた。

「なるほど。確かに日本政府は人選を間違えたようだ。誠実な対応のできる人間を新たに派遣し、問題を解決するように日本政府に要請しよう」

「まだ日本の言う“近代化”とやらに協力しようというのですか！その為に民が苦しんでいるというのに……！」

あくまでも食い下がるマルティンに対してホーレン公は声を荒げた。

「現実を見る！マルティン。もう日本抜きでは何もかもが成り立たないんだ。時代は変わった。我々はそれに従わざるをえないんだ」

「その為に民を犠牲にしると？」

「そうは言っておらん。しかし、目を背け、背を向けているだけでは何も進まんと言っているのだ」

日本と手を切るつもりはない、というホーレン公の確固たる態度にマルティンは言葉を失った。決して良い関係を築いていたとは言えない両者であるが、マルティンはホーレン公を領邦君主としてそれなりに信頼をしていた。そして最後に頼ったその信頼は脆くも崩れさってしまった。

「分かりました。それがあなたの結論なのですね」

震える声でホーレン公にそう告げると、マルティンは彼に背を向けた。

「伯領に一度帰らせていただきます」

「うむ」

意気消沈して帰っていくマルティンの姿を見送ったホーレン公はその時、なにか嫌なものを感じた。

カサンドラ地方

翌朝、自分の屋敷に戻ったマルティンのもとに古くからの家臣や思いを同じくする有力者が集まった。殿村と激論を交わしたあの会議室に彼らを集めると、厳かに宣言した。

「諸君。私は日本の使者、それにホーレン公と話をした。しかし彼らにはあの忌々しい病気の源を撤去するつもりは些かも無い。ホーレン公も日本の操り人形になっている」

皆、予感はしていたとは言え、完全に出口を塞がれてしまったというマルティンの告白の衝撃は大きく、動揺して押し黙っている。「もはや、このカサンドラに安然の日々を取り戻す方法はただ1つしかない。ホーレン公国より離脱し、カサンドラの独立を取り戻す！」

予想外の言葉に消沈していた参加者全員が目を見開かせ、マルティンの顔を見つめた。

「それはどういう意味ですか？」

参加者の1人、地元の有力商人が訪ねた。

「とても中央政府が認めるとは思えません」

「勿論そうだろう。我らの願いを皆で叩き潰そうとするに違いない。だが、やるしかない」

それを聞いて皆が気づいた。マルティンは独立戦争を仕掛けるつもりなのだ。誰もがそこから話を進めることに躊躇した。誰もが発電プラントへの恐怖、そして日本とホーレン公に恨みを抱いていた。その一方でマルティンの主張はあまりにも非現実的で危険なものであった。

次になにをすべきかが分からず、押し黙る参加者達。その中で1人の男がおもむろに両手を挙げた。

「カサンドラ独立、万歳！」

それを皮切りに参加者達が次々と動き出した。

「カサンドラ独立、万歳！」

「独立万歳！」

「万歳！」

「万歳！」

独立を謳う叫びは屋敷中に響いた。

カサンドラの風車 6 (後書き)

あと1〜2回で終わると思います。

カサンドラの風車 7

ホーレン公国首都ペトナ

殿村のエフタル滞在6日目はホーレン公との折衝に費やされた。カサンドラ伯爵マルティンとの仲介を要請した殿村と穂村であったが、返事は曖昧なものであった。どうやらエフタルの貴族も日本流の対応術を学んだようで、2人の記憶ではそれは“それは無理です”という意味の対応であった。

日が暮れて、自分達に割り当てられた部屋に戻った2人はこれらの対応を討議していた。

「残念ながら、内地に助けを求めた方がいいですね」

穂村が冷たい口調で言うと、殿村もいよいよ観念したようであった。

「やはりそうするしかないか」

そう口にする殿村は酷くうなだれていた。今まさに出世の道を閉ざされようという官吏としては当然の反応だった。穂村もかける言葉もなく、嫌な沈黙が部屋を包み込んでいた。

静寂を破ったのは乱暴にドアを叩く音だった。

「どちらさん？」

穂村がドアを開けると、外には日本帝國陸軍の憲兵が立っていた。「非常事態です。叛乱が起りました」

ペトナ郊外 軍施設

オクタード7と敵対するマケドニアと国境を接するホーレン公国
一帯 厳密に言えば国境地帯はエフタル連邦政府直轄地オスト・リ
ーシャでホーレン公国領ではないが には様々な部隊が駐屯してい
る。新編されたエフタル国軍が最大の勢力であり、隣国のラップラ

ンド共和国軍も2個旅団を派遣しているが、最も強力な戦力を配置しているのは何と言っても大日本帝國陸軍である。1個戦車師団を中心にいくつかの支援から成る第一軍が派遣され、戦時にはさらに1個師団が増援として24時間以内に到着する計画になっており、あの大練兵場に隣接する倉庫に増援師団のための装備が保管されている。

それらの雑多な軍隊の合同前線司令部はペトナ郊外に置かれていて、開戦時には3国の軍の部隊を指揮する手筈になっている。その司令部は今、緊張に包まれていた。

「叛乱部隊は？領邦軍では対応できないのか？」

日本陸軍第一軍の司令官が情報参謀に尋ねると、参謀は首を横に振った。中央政府創設前のエフタル連邦では、かつては各領邦が独自の軍事力を保持していた。中央政府創設時にそうした軍事力は国軍として政府に吸収されたが、一部の兵力が領邦の治安維持の為に残された。それが領邦軍である。

「無理ですね。叛乱を起こしたのが、肝心の領邦軍の主力部隊なんです。先ほどホーレン公国政府がエフタル中央政府に正式に援助を要請しました」

参謀はそう言って情報をまとめたメモを司令官に手渡した。

「叛乱部隊は…カサンドラ銃士連隊マスケッターズか。もともとはカサンドラ伯領の部隊だったのか？」

エフタル軍の伝統的な連隊は編制地や所属していた領邦の名を冠しているのが通例である。

「はい。カサンドラ伯のマルティン・ハルトリーゲルがカサンドラの独立を宣言して、カサンドラ連隊がそれに同調したのです」

「中央政府がそれを認める…わけがないか」

軍司令官はそう呟きながらメモを見つめた。

「かつての主君にまだ忠誠を誓っているというのか？カサンドラ伯領がホーレン公国に吸収されてからもう200年も経っているんだろ？」

「構成員はほとんどが騎士階級で、先祖代々の繋がりがああるそうですから。そういう地縁は無視できるものじゃありませんよ」

「そうか」

納得したのか軍司令官は頷きながら呟くように言った。

「それで叛乱軍部隊の戦力はどうなんだ？」

「我々がこの国と国交を結んだ時と変わりませんよ。剣と槍、それに前装銃」
マスルローダー

政府は直轄の国軍の近代化を最優先しているし、各領邦も“農民を威嚇するのに機関銃はいらぬ”と考えていて、限られた財源を領邦軍の近代化よりも領邦内の殖産興業に割り当てている。だから最強の武器が火縄銃やマスケットのような銃口から銃弾を装填する旧式銃というのは領邦軍ではよくあることである。

「国軍が迅速に介入すれば叛乱軍部隊はひとたまりもないでしょう。問題はカサンドラ地域での治安回復です。カサンドラ伯を中心に有力者や領民が集まっています。制圧は血なまぐさいことになりますよ」

参謀の率直な意見に軍司令官はため息をついた。

「こんなことに出くわすとはな。内地からの命令はない。今は部隊を待機させることしかできん。ところでマケドニア軍の動向はどうなっている？」

敵対的な隣国はこちらが混乱しているこの機会を利用して何かしらの行動に出てくるであろう。

「そうです。それが問題なんです」

大日本帝國帝都東京 市ヶ谷統合参謀本部

昭和37年の大陸撤退後、陸海空三軍の統合する平時の参謀機関として統合常設参謀部が開設された。戦時には大本営に改組される計画になっていたが、冷戦が終わり帝國が直面する戦いが国家間の

正規戦から地域紛争対応に移行すると、平時と戦時の区別が曖昧になった。かくして統合常設参謀部も平時と戦時の区別をなくして統合参謀本部に改組されたのは平成15年のことであった。その体制はマケドニアとの正規戦というシナリオが現実味を帯びつつあった平成29年現在も同じであった。

市ヶ谷の統合参謀本部は緊張感に包まれつつあった。同盟国で内乱が発生し、それに伴ってマケドニア軍の活動が活発化しつつあったからだ。衛星による偵察と無線の傍受によりその動きはすぐに軍情報部の知るところになった。

「マケドニア陸軍第一軍が国境線付近まで前進している。4個機械化歩兵師団が戦闘態勢をとってる」

「後方に第三戦車軍及び第七戦車軍も展開しつつあるな。実戦態勢が整いつつある」

マケドニア軍は4個機械化歩兵師団から成る第一軍が戦線に穴を開けて、そこからそれぞれ戦車師団3個から成る2個戦車軍を突入させ、エフタルの国土を蹂躪しようとしているのだろうと考えている。今、マケドニアはその為の配置についているように見えた。マケドニア軍は昭和30年代のソ連軍のような連中で、日本軍のそれとは技術という点では隔絶しているものの、その圧倒的な兵力を無視することはできない。

部下達の報告を聞いていた参謀本部における情報部門のトップ、第二部長を務める陸軍中將は呟いた。

「これじゃあ我が軍もエフタル国軍も動けないな」

「はい。エフタル中央政府は北部管区一帯に戒厳令を発令し、周辺領邦の領邦軍を国軍に編入して鎮圧作戦に投入するそうです」

部下がすばやく報告すると中將は天を仰いだ。最新のハイテク兵器を持つ日本とその同盟国と、圧倒的な兵力の機甲部隊を持つマケドニア軍が対峙する横で、剣と槍で武装した“騎士”達が激突するというのだ。住民を巻き込んで。

「なんてこった。本当に世界は無茶苦茶になっちまった」

おそらく凄惨な戦いになるに違いない。

カサンドラの風車 7 (後書き)

次回でカサンドラの風車は最終話の予定。

防衛省の公式ホームページで来年度防衛予算の概算要求が掲載されました。一昨年、昨年に引き続いて内容を紹介したいと思います。

カサンドラの風車 8

カサンドラ地方

周辺領邦から駆けつけた増援の領邦軍がカサンドラを見下ろす丘の上に立った。背後には叛乱の元凶である風力発電プラントの風車が地上の騒乱など知らぬ様子で回っている。

領邦軍の將兵たちの馬に跨り、槍やマスケットを構えて突撃の準備を整えていた。対峙する叛乱軍の装備も似通ったようなもので、これが現代の戦場であることを示すのは上空から戦場を見守る日本軍の無人偵察機の姿だけである。

戦端を開いたのは領邦軍の砲撃だった。前線に配置された古い青銅砲 後方から曲射支援射撃をするほどの射程はないし、領邦軍にはそれを可能にする組織もない が叛乱軍の陣地に弾を撃ち込み、それを合図に領邦軍の騎馬隊が突撃した。

銃で牽制射撃しつつ騎馬隊は敵陣地に突入する。叛乱軍側も銃を撃って突撃を粉碎しようとするが、連射などできない前装銃では弾幕を形成するには至らず、槍を振り回す騎馬兵達と陣地の歩兵達が正面から衝突した。

槍と槍、剣と剣がぶつかる白兵戦がいたるところで繰り広げられる。叛乱軍の中には武器の代わりに鋤や鎌のような農耕具を持って戦うものの姿もあった。子どもや女の姿もあった。あちらこちらで血飛沫が飛び、流血が大地を覆い、その度に人が倒れた。

双方に多くの犠牲者が出たが戦況は次第に領邦軍側に傾いているようであった。

大練兵場

殿村と穂村が連れてこられたのは彼らがホーレン公国を訪れるの

に使った飛行場のある大練兵場である。どうやら戒嚴令の敷かれたエフトル国軍北部管区内に駐在する邦人全員に召集がかかったらしく、飛行場のロビーは日本人でごった返していた。

こんな僻地にこれだけの日本人が居たのか、と驚いていると殿村と穂村は練兵場の司令部まで案内された。平時においては演習場に過ぎないが、戦時には前線で戦う部隊の兵站基地となる予定の大練兵場には様々な施設が整えられていて、無人機の運用機能もその一つだ。

無人機のカメラの映像を映すモニターには悲惨な戦場の様子が映し出されていた。さすがに軍人達は黙々とそれぞれの任務に勤しんでいるが、文官に過ぎない殿村と穂村には刺激が強すぎた。穂村は口元を手で覆って、床にうずくまっていた。

「我が軍は動かないのですか？」

殿村が尋ねると2人を案内した軍人が首を横に振った。

「マケドニア軍が活発に動いています。そちらへの警戒の為に、我が軍は動けません。そちらは大丈夫ですか？」

軍人は穂村の様子を覗きこんで心配そうに言った。無言の穂村の代わりに殿村が返事をした。

「どこか休める場所はないかな？」

「それなら応接室があります。案内しますよ」

会戦から領邦軍による一方的な虐殺に移行しつつある戦場を映すモニターを背後にして、殿村と穂村は司令部を出た。

2人を案内した軍人が司令部に戻り、応接室には殿村と穂村、2人つきりになった。

応接間にはテーブルを挟んで置かれている二組のソファがあり、それに2人は分かれて向かい合って座った。家具の他には壁に件の発電プラントのポスターが貼られている以外に飾り気のない質素な部屋であった。

穂村はカバンから文庫サイズの本を取り出し、それを手にしてなにやら唱え始めた。本はよく見ると新約聖書だった。

「あんた、キリスト教徒だったのか？」

「なにか問題でも？」

ようやく落ち着いたらしい穂村が少し棘のある口調で応じた。これまで彼の非友好的な宗教に対する態度を見てきたので、身構えている。それに対して殿村は不敵な笑みを浮かべた。

「いやな。なんでそんなもん信じているのかと思ってな。神に救いを求めた拳句が、あの伯爵様と家来達はあの様なんじゃないか？ それを見ていたのに、あんたも神に救いを求めるのか？」

「なんであなたはそう宗教をやたら敵視するんですか？」

さらにきつくなった口調で尋ねる穂村に、殿村は笑みから一転して険しい表情になった。

「あれは十・・・何年前だったけな？ そうだ。平成13年9月11日、俺の親父はな、その日にな、世界貿易センタービル南棟の79階に居たんだ」

殿村の告白に穂村は言葉を失った。

「親父は銀行員で、ニューヨークの支店に勤めていた。そして旅客機に直撃された。なあ、あんただって憶えているだろう？ あの日を」

忘れるわけがない。穂村もまだ小学生だったあの日のことを克明に覚えている。20世紀の最後の年に短くも苛烈な大戦争を経て、世界平和を脅かす最後の脅威が取り除かれたと信じていたあの時代。21世紀という平和な時代の訪れを祝っていたあの日々。そしてその幻想を一瞬にして打ち砕いたあの日。

「なあ。あの日以来、あのターバンを巻いて宗教戦争を仕掛けてきた連中の為に何人の日本人が命を落としたと思う？ 宗教に狂った連中のためにどれだけ犠牲になったと思う？」

日本はアメリカとともに対テロ戦争に立ち上がり、アフガニスタン、そしてイラクへと軍隊を進めた。“大転移”までの間に1000人を超える戦死者を出している筈である。

「ようやくあの連中の居ないところまで来たと思つたら、今度はエトナ教会だ。だいたい歴史を思い返しても、あの手の連中は碌なことをやらないじゃないか？ 虐殺、侵略、民族浄化、テロ。神の名の下にやりたい放題してきたんだ。嫌って当然じゃないか。あんな連中、皆殺しにしちまえばいいんだ」

不穏な殿村の言葉に穂村はため息をついた。

「皆殺しつて、あなたが嫌いな原理主義者みたいじゃないですか」

穂村の指摘に殿村はたじろいだ。どうやら自覚はなかったらしい。穂村は続けた。

「結局、人間なんてそういう生き物なんですよ。本質的にそういう性質を持つ生き物なんです。普段は理性という仮面で隠しているけど、何かしらの大義名分があれば、理由があれば簡単に馬脚を現す。その大義名分の1つに宗教があるだけです」

スターリンは大勢の人間を殺したが、それは彼がイスラム教徒であつたからではないじゃないか。それに彼が宗教の起こす悲劇の1つとして挙げたテロの語源となつた騒動を起こしたのは民主主義の信奉者達だ。

「だから人間の根本の問題なんですよ。それを宗教に押し付けるのは問題の本質を見誤っていると私は思います」

それから穂村は聖書を掲げて見せた。

「私は神を信じます。確かに居るかも分からないものに縋って生きるのは不健全かもしれません。だけど何かに常に見守られていると思つた方が、思わないときより健全に生きられる気がするのです」

「神は逸脱の原因になることもなれば、止めることもある。と言いたいのか？」

殿村の言葉に穂村は頷いた。

「それに今回の件は宗教だけが原因じゃないでしょ」

そう言つて壁のポスターを指した。そこには青空をバックにした巨大な風車の写真が印刷されていた。

「まだ疑っているのか？」

「もし原因がああ風車なら、我々はもつと真摯に対応すべきだったんですよ」

それを聞いた殿村は鼻を鳴らした。

「だからな。あれは安全なんだよ。原発みたいに放射能を撒き散らすわけじゃない。有害物質をばら撒くわけでもない。内地の環境NPO団体からも認められたエコ発電なんだ。あの震災以来、内地でだってあのような風力発電プランがどんどん増設されているんだ」

風力発電施設の周辺では頭痛、不眠症、精神の異常といった様々な健康被害が報告されている。それらの被害は“風車病”と呼ばれ、プロペラが高速回転する時に発生する騒音や低周波が原因ではないかと見られている。しかし、風力発電施設とそれらの健康被害の関連性が公式に認められたことは無く、また“風車病”自体があまり世間では知られていない。

近年、環境問題や原発問題の為に風力発電のような再生可能エネルギーに注目が集まっているが、“風車病”のような危険性や問題点について真剣に論じられることはあまりない。

原発の安全神話が批判に晒されて久しいが、その傍らで新たな“神話”が創造され、新たな信仰が生まれようとしているのかもしれない。

カサンドラの風車 終

カサンドラの風車 8 (後書き)

というわけで1つ終わりです。次回の更新をお楽しみに。

時間逆行者の誤算（前）

阿川正洋青年はある日、ふと目覚めると第二次世界大戦以前、1930年代にタイムスリップをしていた。それに気づいた阿川青年は、これより日本が直面する悲惨な敗戦を回避し、よりより未来へと導くことを決意したのである。

早速、阿川青年は海軍との連絡を試みた。日本が直面する危機を説明して信頼を得ると、天皇陛下との謁見を果たし、敗戦を回避する為の具体的な行動を開始した。

アメリカに対抗できる戦力を整える為に様々な施策を実行したわけであるが、特に陸軍の強化が徹底された。日本海軍は世界三大海軍に数えられてどこに出しても恥ずかしくない戦力を保有しているが、翻って陸軍は全体的に旧式で劣っている。陸軍軍人は頑固で古い白兵戦思想、精神主義に固執し、機械化や砲火力の強化といった近代化に背を向けて、合理性をかなぐり捨てた補給無視の突撃主義に毒されていた。アメリカに勝てないまでも負けない戦いをする為には陸軍の強化が必須だった。

阿川青年は天皇陛下の後ろ盾を得て、無能な陸軍軍人を次々と更迭した。さらに北支から陸軍部隊を撤退させて中国と和平を結び、それから陸軍部隊の大幅な軍縮を実行して影響力を削いだ。そして軍縮で浮いた軍事費で海軍の増強と陸軍の近代化を急いだのである。

まず行つたのは新型戦車の開発だった。陸軍は戦車を歩兵支援の道具としか考えていなかった。それ故にノモンハン事件では強力なソ連戦車を相手に大敗を喫したにも関わらず戦訓は無視され、対戦車戦闘能力を持つ戦車の開発はなかなか行われず、太平洋戦争では

アメリカのM4戦車に日本の戦車は再び大敗を喫することになる。そして万歳突撃の悲劇に繋がるのだ。

阿川青年はその悲劇を回避すべく強力な戦車の開発に努めた。そうして管制したのが百式戦車である。M4の装甲を確実に貫通することが出来る長砲身76ミリ主砲を持つ30t級の大型戦車だ。史実の戦車の惨めな状況を考えれば、夢のような高性能戦車である。

さらに改善は装備そのものだけでなく運用面にまで及んだ。陸軍は戦車を歩兵支援の為の道具としか考えておらず、各方面に分散して配備していた。そこで阿川青年はドイツ流の電撃戦思想を取り入れて機甲師団を編制し、戦車をそこに集中配備することにしたのである。頭の固い陸軍上層部の抵抗に遭遇したが、阿川青年は天皇陛下の助力を得て乗り切った。

続いておこなったのは歩兵の強化である。銃剣突撃しか頭がない陸軍は古い時代遅れのボルトアクションライフルから何時までも脱却できなかった。それ故に半自動式小銃を持つM1ライフルを持つアメリカ軍に敗れたのである。阿川青年はM1ライフルの情報を伝え、同様の性能を持つライフルの開発を要請した。

それに並行してドイツのMG42機関銃を基にした新型機関銃のプロジェクトも進められた。

こうして完成した百式小銃と百式機関銃は帝國陸軍の標準火器として採用され、同じく開発が進められた無反動砲、携帯噴進砲なども相まって陸軍歩兵の火力は大いに向上した。

それから砲兵の近代化へと手を伸ばした。前述したように白兵戦、精神主義重視の陸軍において砲兵火力も軽視され、第二次世界大戦時も主力野砲は日露戦争直後に導入された三八式野砲であった。このような有様では勝てるわけがない。

百式戦車の車体を流用し、75ミリ砲の砲塔を載せた一式自走砲の開発し、主力野砲とした。この車輛は前線部隊の支援任務だけで

なく対戦車戦闘にも用いることができる性能を持っていた。

かくして陸軍の装備の大幅な強化は達成された。それを実力重視で登用された有能な軍人達が操るのである。かつての無能で時代遅れの陸軍の姿はどこにも無かった。ようやく阿川青年は陸戦に関して自信を得ることができたのである。

そうこうしている間に世界情勢は激動の真つ只中を進んでいた。ヨーロッパではナチスドイツがポーランドへと進撃して第二次世界大戦が勃発した。ナチスはその後も北欧、西欧へと兵を進めイギリスを除くほぼヨーロッパ全域を制圧した。

一方、経済不安打開の為に第二次世界大戦への参加と中国市場の支配の機会をうかがっていたアメリカは日本の経済封鎖を強行した。日本にアメリカを先制攻撃させようと企んだのである。

石油を断たれば日本に未来はない。日本は畏と知りつつも、アメリカとの戦争に突き進まざるをえなかったのである。

1941年の末、択捉島の単冠湾ひとかつぶから真珠湾を攻撃してアメリカ艦隊に大打撃を与えるべく機動部隊が、また海軍の軍政下にある海南島より東南アジアを解放すべく強襲揚陸部隊が出撃して言った。

阿川青年はこの時、侍従武官として天皇陛下に直接助言をできる立場にあった。そこから間接的に日本海陸軍を動かす、悲惨な敗戦を避けるべく動いているのだ。

その阿川青年のもとへ連合艦隊出撃の報が届いた。アメリカは強大な敵である。しかし彼が心血を注いでつくりあげた新生日本軍が必ずアメリカ軍を打ち負かし、日本に勝利をもたらすと確信していた。

1941年12月8日、日本とアメリカは戦争状態に突入した。

時間逆行者の誤算（後）

平成の世から昭和10年代へとタイムスリップしてしまった青年、阿川正洋は日本を悲惨な敗戦の運命から救うべく動いた。天皇陛下と接触して海軍とも友好関係を築いた阿川青年はアメリカに負けないう国に日本を改革するため、様々な施策を実行したのである。そしてその成果が今、実ろうとしていた。

電撃的な攻撃作戦で東南アジアから欧米列強の軍隊を駆逐し、瞬間に日本の勢力圏をアジア全域に広げたのである。しかし、最大の敵であるアメリカはその圧倒的な工業力を以って戦力を蓄え、反撃を始めようとしていた。日本海軍はアメリカの反撃の出鼻を挫くべく、東へ東へと兵力を進めていた。

海軍侍従武官として戦争指導部の一角に加わっていた阿川青年はある日、大本営に呼び出された。いまや盟友となった海軍の重鎮によれば、陸軍が重要な作戦に協力してくれないと言っているのである。

「なんとということだ。海軍と陸軍が協力しなければ、戦争に勝てないぞ！陸軍はなにを考えているんだ！」

どれほど改善しようとしても陸軍は所詮陸軍なのか、と阿川青年は絶望的な気持ちに苛まれた。

大本営の会議室には海軍と陸軍の指導者達が集まっていて、睨み合いになっていた。

「陸軍は兵力を出せないとやっているそうだがどうということか！海軍と陸軍が手を取り合って戦わなければ、戦争に勝つことが出ないんだ。陸軍の利益ばかり主張するようなマネはやめろ！」

会議に加わるや否や怒鳴る阿川青年に陸軍の将星たちは冷ややかな視線を送った。

「陸軍はそのような僻地に部隊を送る準備が出来ておりません」

陸軍の代表が静かな、しかし怒りの籠った声で告げた。

「準備が出来ていない？ どういうことだ？ 作戦研究を怠っていたというのか？ 緒戦の勝利で慢心しすぎなのではないか？ 重要な作戦なのに……」

阿川青年は陸軍がまた調子に乗っているのだと思った。だから陸軍の代表の次の言葉は彼に冷や水を浴びせることになった。

「重要な作戦だというのなら、事前に我々に報告し、協定を結び、共同で作戦を行うべきではないのか？」

さっきの静かな口調から一転して陸軍の代表は阿川青年に負けないう怒鳴り声をあげた。それが引き金となったのか、陸軍の将星たちが一斉に不平不満を晒けはじめた。

「そもそも貴様らが陸軍如きの助けは要らぬと勝手に上陸したのではないか！ その癖にアメリカの反撃に遭って飛行場を奪われたから助けてください、だと！ 随分、身勝手な話ではないか！」

「その癖になんだあの言い草は！ 陸軍は海軍に従うのが当然とでも言うのか！」

「あのような遠くの島では兵站が維持できるとは思えんが、大丈夫なのかね？」

「そもそも反撃してきたアメリカ兵は小規模だというのは真実なのか？」

思わぬ陸軍の主張にたじろぎつつも阿川青年は言葉の応酬を続けた。

「なにを言うか！ 陸軍は海軍を信じられぬというのか！ 現地海軍將兵の報告だから相手の規模は正確だ。兵站なら連合艦隊が全力を以って守ろう。それとも陸軍はアメリカ兵が怖いというのかね？」

そこまで言われては陸軍も引き下がるわけにはいかない。

「よろしい。陸軍からも部隊を派遣しよう。だが連絡線の守りは海軍の担当だぞ」

海軍の代表も言い返す。

「当然だ。我々は口だけ達者な君達とは違つのだ」

戦場は遙か南方の島だつた。海軍の飛行場を奪取した小規模なアメリカ軍部隊を掃討するために上陸した連隊規模の日本陸軍部隊はすでに危機的状況にあつた。

彼らを輸送すべく出撃した船団はすぐにアメリカ海軍潜水艦戦隊の標的になつた。僅かばかりの護衛では襲撃から船団を守りきるこゝとなど到底不可能であり、道中で兵員の3分の1と重装備の過半を失ふことになつたのだ。海軍の主力部隊はアメリカ艦隊出現の報に接すると、輸送船団を放り出して攻撃に向かつた。

ともかく辛くも部隊の3分の2の將兵を上陸させることができた。だが彼らを待つていたのは戦車をも含めた強力なアメリカ海兵隊の1個師団であつた。

「なにが小規模な部隊だ！ふざけやがつて！」

海岸に橋頭堡を築き、内陸に進んだ陸軍部隊を待つていたのは圧倒的な火力で守られた大規模な防御陣地であつた。多くの主要装備を失つた増強連隊の手に負える相手ではなかつた。彼らは橋頭堡まで逃げ戻らざるを得なかつた。

内地ではラジオが海上決戦における大勝利を宣伝して国民の多くが勝利の美酒に酔つていたが、大本營の空気はまったく正反対であつた。

「兵站は守つてくださるんじゃないのか？」

陸軍の代表の詰問に海軍の將星たちは押し黙るしかなかつた。戦車も大砲も沈み、現地に上陸した陸軍部隊は軽装歩兵部隊でしかなかつていた。しかも兵力は4分の1以下だ。

ようやく阿川青年が口を開いた。

「しかし敵艦隊は撃退した。これで艦隊は海上護衛作戦に注力できるはずだ」

「つまり、あの島での作戦を継続するというのだな？」

陸軍の代表が尋ねると、押し黙っていた海軍の代表が頷いた。

「陸軍はもう無理だと言うのなら諦めるしかないが？」

海軍代表の表情は暗く、懇願するような口調になっていた。阿川青年にはそれが気になったが、海軍の背任に激高していた陸軍の代表は気づかなかつた。

「なにを言うか！増援部隊を送り込む、補給を維持することが出来れば作戦は継続可能だ！敵主力を撃退したなら大丈夫だろう？海軍はやってくれるんだな」

陸軍代表の言葉に海軍代表は無言で頷いた。かくして第二段作戦の決行が決まった。

会議が終わると阿川青年は海軍の将星たちを呼び止めた。

「どうしたのですか？提督。先ほどの発言、私には陸軍側から作戦中止を主張してほしいかのように聞こえましたか？あれほどの大勝利をした後なのに、海上護衛作戦に不安があるんですか？」

海軍の代表である提督は首を横に振った。

「いや、実を言いますと……」

それから提督はとんでもないことを打ち明けた。大本営発表では海軍連合艦隊は敵アメリカ艦隊と交戦し、いくらかの犠牲と引き換えに複数の空母を撃沈するなど多大な戦果を上げたと報道された。しかし、その内容はトンでもないデタラメであった。自軍の被害を過少に発表し、さらにアメリカの被害について後に調査したところ被害をほとんど与えることが出来なかつたことが判明したのだ。

「では、アメリカの主力艦隊は健在なのですか？現地の制海権は？」

「既に敵中にあるものと……」

「そんな！どうしてそれを陸軍に伝えないのですか！」

問い詰めに対する海軍代表の回答は阿川を絶句させることになった。

「それでは、我々の所為で作戦が中断することになるじゃないですか！」

驚きのあまり言葉を失った阿川に対して将星たちの口は軽くなつていて、それぞれ勝手なことを言い始めた。

「まったく。だから陸軍からやめてもらおうように言ったというのに……」

「奴らには我々の機微は理解できんよ。あの単細胞どもには」

「所詮、陸軍は陸軍ということか」

一輛の百式戦車が嚴重に偽装された陣地に身を隠して、街道に砲身を向けていた。海上における熾烈なアメリカ海軍の襲撃を生き延びて辛くも上陸できた僅かな戦車の1つである。この一帯には戦車を動かせる適地は街道周辺だけで、アメリカ軍の戦車部隊を投入してくるとしたらここしかない。既に数輛のM4シャーマン戦車が百式戦車の前で骸を晒している。百式戦車がM4シャーマン戦車と十分に渡り合えることが証明されたわけだが、危機的な状況にある乗員達にはなんの慰めにもならなかった。

既に百式戦車を動かすための燃料は無く、百式戦車を中心に陣地線を敷いてひたすら守りに徹するしかない。しかも、砲弾は底をつきかけていた。

「砲弾を使い尽くしたら、爆薬を仕掛けて脱出する」

戦車長である少尉が乗員達にこれからの行動を指示していた。

「その際には車載機関銃を下ろし、我々は歩兵として戦うのだ」

「補給が届けばいいんですが……こんないい戦車、破壊するなんて惜しいですよ」

「補給が届かなくてはしかたない。燃料も砲弾も無ければ、ただの鉄の塊だ」

部下を諫める戦車長だが、その目は涙ぐんでいた。

「我々は上陸して敵と一戦を交えることができたのだ。上陸も叶わず海に沈み、護国の鬼となった同胞たちと比べれば幸せなものではないか」

その時、外から爆発音が響いてきた。戦車長が慌てて砲塔のハッチから顔を出すと、友軍の陣地が砲撃を受けていた。

「敵襲だ！敵襲！」

戦車長は慌てて顔を引っ込めて、部下に戦闘の準備をさせた。残弾は徹甲弾5発、榴弾12発。

歩兵隊も陣地に籠り、アメリカ軍の攻撃に備えていた。アメリカ軍の砲撃が彼らの上に降り注ぐ。しかし味方の砲兵は撃ち返そうとしない。多くの砲が海に沈んだ上に、砲弾の補給がなかなか届かないのであるから当然である。

激しい砲撃の後、アメリカ海兵隊の歩兵達が戦車の支援を受けて突撃してきた。日本陸軍も銃撃で応戦する。しかし、その火力は心もとない。

「無駄撃ちするな！弾薬を節用するんだ！」

指揮官の掛け声が響き、兵士達はしつかり狙いをつけようとしてなかなか引き金を引こうとしない。小銃も機関銃も史実に比べ弾薬消費量が大きく増加したために、補給が心もとない状況下では射撃が萎縮してしまったのである。

一方、アメリカ軍は弾切れの心配など無いので容赦なく撃ちまくってくる。結果は見えていた。

敵戦車を1輜撃破したところで歩兵の陣地が突破された。防衛線は瓦解し、生き残った兵士は撤退していく。燃料の無い動けない戦車は置いていくしかない。

「爆破の準備を！」

戦車長が外を警戒しながら命じた。砲手は車載機関銃を取り外し、装填手と通信手は爆薬を取り出す。

「脱出だ」

乗員達が外へ飛び出し、味方の戦線に向けて駆け出す。その後ろで百式戦車が爆発、炎上した。

「畜生！補給さえあれば……」

戦車長は炎上する愛車を肩越しに見て呻いた。

大本営の会議は紛糾したが、問題の島から撤退するという結論にようやく達した。だが、陸軍軍人たちの海軍に抱いた不信感を拭い去ることはできなかつた。

「なんなんだあの連中の態度は！」

海軍は自分達の失態を棚に上げて陸軍の敗北を非難し、あまつさえ“撤退のために艦隊を動かしてやる”という態度を終始貫いてた。「あいつら、アメリカ力を撃退するとか行っていますけど、本音は我々を潰すことなんじゃないですかね？」

「まったくだ。陸軍には中国の主権を侵害するのはけしからん、東亜共栄のために部隊を撤退させるべきだなんて奇麗ごとを言うくせに、自分達はちゃっかり海南島を保持しているあたりから怪しいと思っていたんだ」

その時、将星たちのもとへ真っ青な顔をした中佐が慌てて駆け寄ってきた。

「大変です。ソ連軍が満州へと侵攻しました」

ソ連軍の攻撃に直面した関東軍はひたすら撤退するしかなかった。

阿川青年と海軍の主導による改革により兵力と予算を削減され、ソ連軍の大兵力に対抗できる戦力を持ち合わせていなかった。

さらに減らされた予算を阿川青年の推す高価な各種新装備に多くを割かれた結果、一部の優良師団とその他の師団には絶望的な能力の差が生じ、ソ連軍の猛攻の前に優良師団以外の部隊は対抗する術をまったく持っていなかったのである。特に砲兵予算が阿川青年の改革により自走砲と大型要塞砲にばかり配分され、野砲や野戦重砲の整備がまったく進んでいなかったことが致命的であった。

かくして日本陸軍部隊は敗走するしかなかった。日本からの移民たちは戦場に取り残された。それでも戦い続ける部隊がいた。

戦場近くの駅で貨車から戦車が降ろされる。その数は11。つまり1個中隊である。日本陸軍の戦車は基本的に戦車師団に集中配備されているが、少数の戦車師団に広い戦場をカバーできるわけもなく、百式戦車部隊は連隊、中隊単位に分割されて、各地の戦場にソ連軍に対抗できる数少ない戦力として派遣されたのである。

貨車から降りた戦車中隊はただちに戦場に向かった。敗走する友軍の最後尾を探して北上していくのだ。そして街から離れた丘の上に戦車を止めた。そこからは南下してくるソ連軍戦車部隊の大群を眺めることができた。

「撃て！」

相対距離は76ミリ主砲の最大射程にほぼ等しかった。しかし熟練した戦車兵は初弾から見事に命中させた。しかし迫る敵の数を見れば別に狙う必要さえないのかもしれない。どこに撃っても当たる。そういう状況であった。南下してくるT-34が次々と炎上する。しかしソ連軍は損害も気にせず進撃してくる。

T-34の大部隊が迫ってきたところで味方が安全圏まで脱したことを知らされた。戦車中隊指揮官はただちに部下に撤退を命じた。だが彼らの任務は終わったわけではない。満州にはまだ増援を必要とする部隊が数多く存在しているのだ。

内地では再び陸軍と海軍の協議が始まっていた。協議は海軍将星による陸軍への批判から始まった。海軍軍人たちはこれまでの鬱憤を晴らすかのごとく、満州における陸軍の敗北を叩いた。陸軍の将星たちは口を噤み、ひたすら海軍軍人の罵声に耐えた。

「それで陸軍はどう対応しているのかな？」

罵声は阿川青年のこの一言でようやく収まった。陸軍はソ連陸軍との決戦を避け、いくらかの反撃で敵の足止めをしつつ朝鮮に向けて撤退を続けている現状を説明した。

「それでは邦人はどうなるんですか！」

阿川青年の悲痛な叫びに陸軍の代表は首を振った。

「これ以上のことを行う戦力はありませんよ」

あなた方に兵力を削られてしまいましたからね、とは彼は口にしなかった。そんな陸軍代表の思いを知ってか知らずか、海軍の軍人たちは罵声を再会した。

「陸軍はなにをやっているんだ！」

「役立たずの陸助め！」

「これだから陸軍は！」

激しい罵声は阿川青年の一言で再び収まった。

「戦車師団は？あれならばソ連軍に対抗できる筈だ」

すぐに陸軍の代表は返答した。

「戦車師団は解体し、戦車を各地の増援に派遣しています」

陸軍の代表は特に意識することなく普通に答えたが、阿川青年は大きな衝撃を受けた。混乱を利用して改革を後退させようとしている！阿川青年はそう感じ取った。ドイツの電撃戦が示したように機甲部隊は集中運用においてその真価を発揮するのだ。だからこそ阿川青年は歩兵中心主義に毒された陸軍の抵抗勢力を排除しつつ、電撃戦のための戦車師団を編制したのである。だが、それが戦車を分

散運用する古いやり方に戻りつつある。

「ただちに戻してください！」

阿川青年の突然の発言に会議が止まった。

「ただちに戦車を集結し、戦車師団を再編してください」

「ですが、広い戦線をカバーするには分散して使うほかには…」

反論を始めた陸軍の代表を阿川青年は手で制した。

「いいから、ただちに実行してください」

戦車中隊は貨車を下りて戦場へ向かおうとしていた。だが、駅からサイドカーが追ってきて戦車隊を呼び止めた。

「戦車師団に集結命令？」

中隊を指揮する少佐は突然の命令に面食らった。

「なんで今になってこんな命令が…すぐそこに増援を必要とする部隊が待っているというのに…」

「私に聞かれましたも…」

末端の伝令が知るところではなかった。

戦車中隊が立ち往生している北方では砲撃の爆音が轟いている。増援を待つ友軍とソ連軍が戦闘に突入したようだ。少佐には苦渋の決断が迫られていた。他の戦車の乗員達も戦車を降りて中隊長の決断を待っている。

「君は我々には追いつけなかった」

ふと少佐が伝令につぶやくように行った。伝令が少佐の真意を測りかねて怪訝な表情をしていると、少佐は自分の部下たちの方へと振り向いて、伝令に背を向けた。

「君は我々と接触できなかった。それでいいね」

それを聞いて少佐の部下達は歓声をあげ、それぞれの戦車に乗り込んだ。伝令の兵もようやく少佐の言わんとすることを理解し、抗議する代わりに少佐に敬礼を送った。

その頃、南方の孤島では戦いの終わりが迫っていた。一時は2個師団まで膨れ上がった兵力は、陸軍が最初に上陸させた戦力と同じ1個連隊規模まで減っていた。島から消えた兵力のうち、半分は無事に島から撤退に成功した兵達だが、残りの半分はこの島に骨を埋めることになった。そして最後に残った殿の連隊にも最期が近づいていた。

当初は順調に進んだ撤退作戦だが、このところアメリカ軍の警戒網の突破が難しくなり、成功率はめっきり下がってしまった。そこへソ連軍の満州侵攻が重なり、内地はもうこのような遠方の孤島に構っているどころではなくなっていた。遂に大本営は撤退作戦の中止を決定したのである。どだいアメリカ軍の包囲網は日に日に嚴重になり、もはや突破は不可能になっていた。

残された殿部隊にできることはほとんどなかった。もともと不足していた糧食や弾薬はいよいよ枯渇し、残るは銃剣と将兵の気迫のみであった。

最後に残った将兵を指揮する洞穴の中の司令部では火が焚かれ、その中に連隊旗が投げ込まれた。陸軍軍人の魂を具現化した連隊旗を奉焼するということは、覚悟を決めたということだ。既に内地には決別電報も送っている。灰になった連隊旗に司令部の面々は最期の敬礼をすると洞穴を出た。外には将兵が集まっていた。

「万歳！万歳！万歳！」

連隊は最期の突撃に向かった進軍を開始した。残った武器は銃の先につけた銃剣のみ。この戦いには戦術もなにもない。ただ突撃あるのみだ。

いよいよ敵の前面に達した。アメリカ軍も勘付いている筈で、すでに銃を構えて待ち構えているはずだ。連隊長は腰に差した軍刀を抜き、刃先を敵の待つ方へと向けた。

「突撃！」

兵士達は雄たけびとともに駆け出した。それにアメリカ軍の放つ銃声が続いた。

時間逆行者の誤算（後）（後書き）

と、まあ陸軍悪玉論、海軍善玉論へのちよつとした嫌味です。

そりゃ、日本陸軍は決して先進的とは言いがたい軍隊ですけどね。

南方島嶼戦で敗れた最大の敗因は日本戦車の貧弱さでも、小銃がポルトアクションだったからでもありません。制海権の喪失でしょう。でも、陸軍は無能だ、それに比べて海軍は…なんて話ばかり。

陸軍は補給の重要性を理解していない、なんて言われますけど海軍よりマシですよ。限界線を超えて戦線を拡大していったのは海軍ですよ。ガダルカナルだって海軍の尻拭いですよ。

まあ、それだけの話です。それと“防戦の場合”は必ずしも戦車の集中運用は正しくない。

DEAD HAND〜史上最後の海戦〜(前)(前書き)

アニメ学園黙示録HOTDを見てたら思いついたのがコレという
お話。つか、もう一年以上前のアニメなんだね…

DEAD HAND〜史上最後の海戦〜（前）

ロシア連邦 コスビンスキー山地下ロシア軍司令部

なにもすることができず、ただ時間ばかり過ぎていった。巨大な花崗岩の下に建設された核攻撃にも耐え得る史上最強の要塞は母国を襲う悲劇に対してまったくの無力であった。

幾つも並べられたコンピューターシステムや通信機のコンソールの前で通信士たちは何もすることなく無為に時間を過ごしていた。各地から入る連絡は途絶え、残るは沈黙だけであった。

そこへ中將の階級章をつけた初老の男が入ってきた。

「諸君。モスクワとの通信が途絶えて72時間が経った。これより大統領命令30号により事前に定められた作戦計画に従い“死の手”作戦を発動する」

予期してはいたが、それでも通信室に詰める男達は中將の命令に驚いた。命令そのものに対しては勿論だが、命令する中將がそれを至極当然のことのように命じたことも信じられなかった。

「ただちに命令電文を発せよ」

中將の厳格な命令に通信士たちも平時の通信と同じくらいあっけなく命令電文を発する作業を実行した。

かくしてコルビンスキー山司令部からの最後の命令はロシア各地、そして太平洋や大西洋で活動する“戦略部隊”に対して送信された。

太平洋　ロシア海軍原子力戦略任務ロケット潜水巡洋艦K-44リヤザン

西側ではデルタIII型のコードネームが与えられているプロジエクト667BDR型は16発の弾道核ミサイルを装備し、ロシアの核抑止力の根幹として機能している。まさにロシア軍最後の切り

札であるわけだが、しかし乗組員達はそれを任せられている精鋭という風にはどうも見えない。誰もがイラつき、そわそわしていて任務にまるで集中していないのである。乗組員の中では知らぬ間にある噂が広がり、それに気をとられてしまっているのだ。

「噂は本当なのか？世界中で死者が蘇って人間を襲っているって」

「そんな映画みたいなきっかけがあるわけあるか！」

「でも浮上したときに見た衛星テレビでは……」

「あんなもの西側の謀略に決まっている！」

艦内に流れている噂というのは荒唐無稽な内容であったが、信ずる値する根拠はいくらでもあった。それはアンテナ深度まで浮上したときに受信した各国のテレビ放送である。そこには死人が生きている人間に襲い掛かり、襲われて噛まれた者も死んでまた蘇り、人々を襲う群れの中に混じっていく光景が放映されていた。そして、それに前後して士官達が部屋に籠って会議に明け暮れている。ほとんどの乗組員は噂を信じ始めていた。

士官室

現実と向き合った将校達の顔色は噂話をする水兵たちよりもずっと深刻だった。彼らはそれを噂ではなくて真実として知らされたのであるから当然である。

「しかし、そんなことがありうるのですか？」

また現実を受け入れたくない若い将校が震えた声で尋ねた。

「死者が蘇り狂犬病にかかった犬みたいに人々に襲い掛かるなんて拳句に噛まれた人間も同じようになっちまうなんて」

「だが、現実のことだ」

艦長はきっぱりと言った。

「モスクワ、ハバロフスク、ウラジオストク。どこからの通信もそれが真実であることを示している」

そして、それらの諸都市との通信は既に絶たれていた。K44が継続的に通信を維持しているのはカムチャツカ半島の基地と護衛として航海に同伴している攻撃型潜水艦K295サマラだけであった。「そしてカムチャツカ経由でこれが送られてきた」

艦長は命令書を皆が見えるように机の上に広げた。そこには“大統領命令30号”と書かれている。それを見て副長が顔色を変えた。「“死の手”を発動しろと？こんな時に？まず司令部に照会を行うべきです」

副長の提案に艦長は首を振った。

「カムチャツカが既に司令部へ問い合わせようとしたが、返答がないそうだ。通信は完全に途絶している」

一呼吸してから艦長は続けた。

「このような命令を実行することにどんな意味があるのか、私には分からないが、少なくともこれは正式な命令だ。我々には軍人としてこれを実行する義務がある」

「実行すべきだとお考えなのですか？」

副長の問いに艦長はイエスともノーとも言わなかった。

「正直言っただけから」

ロシア海軍原子力潜水巡洋艦K295サマラ

西側でアクラ型と呼ばれるプロジェクト09710型攻撃型原潜はロシアが保有する最高の工業機械の1つだ。索敵システム、兵器システム、航行能力、静粛性。どれをとっても歴代の潜水艦の中で最高水準を誇り、西側に対抗できるロシアの数少ない兵器システムの1つとして各国に恐れられている。しかし、そんな栄光ももう終わりだ。なにしろ祖国も敵国もそろって壊滅しようとしているのだから。

「まったく酷い有様だ」

K295の士官室にもK44と同様に将校達が集まり今後の方針を巡って議論が交わされていた。士官室内のテレビには潜望鏡深度まで浮上して海面上に通信アンテナを出した時に傍受した各国のテレビ映像を録画したものが流されていた。

生ける屍が生者を襲い掛かり、その身体を食いちぎっていく光景。混乱し、パニック状態の人々。略奪、銃撃、そして確実に広がる被害。楽観的になれる要素は1つもなかった。

議論を一応は交わしているが、答えは出そうにもなかった。事態が事態である。答えなどであるわけがなかった。

「それとK44の問題もあります。モスクワとの通信が絶たれたとならば、“死の手”が発動するのは間違いありません」

副官の指摘にK295艦長が頷いた。

「K44艦長に確かめる必要があるな」

その時、士官室の扉を叩くものは居た。副官が扉を開けると若い水兵が立っていた。

「緊急事態です」

発令所

艦長らが発令所に顔を出すと、そこは沈黙が支配していた。“地上の有様”を噂するひそひそ話は聞こえなくなり、代わりに戦闘態勢にある軍艦独特の緊張感が張り詰めていた。

「なにがあつた？」

艦長が尋ねると、当直士官は海図台を示した。そこにはK44とK295を示す赤い駒、そして正体不明艦を示す青い駒が置かれていた。

「2分前にソナーが探知しました。おそらくアメリカ艦です」

それを聞いて将校達の顔色が変わった。当直士官は説明を続けた。「K44を追尾しているようです。我が艦に気づいているかは定かではありません。念のために戦闘配備を発しました」

整然と説明する当直士官に艦長は素直に感心した。このような非常時によく立派に任務をこなせるものだと思った。いや、この非常時だからこそ任務に徹して気を紛らわしているのかもしれない。

「良い判断だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1209g/>

異世界情景

2011年12月21日00時54分発行